林　竹二先生について

竹内敏晴（南山短期大学教授）
星野欣生（南山短期大学教授）
米沢穂積（嵯峨美術短期大学教授）

竹内：話の元はというのは、四ヶ月こちらに米沢さんが研究員としておられて、最後に色々お話したんだけれど。その時林竹二先生の事についても聞きたいことがあると言われたんですね。私はちょっと不意をつかれたというか、私は林竹二先生については、実は亡くなられてから公式発言をいっさいしてないんです。非常に短い追悼の文を一つだけ書きましたけれども、自分の中でもまだもうちょっと時間がいるという感じがあるんですけれども、しかし、いま何か考えをまとめるというよりは、これから考えをまとめるための足がかりになるような事をお話合の中で僕がつかめたら有難いという気持ちがあって。もう一方では、星野先生がずっと「人間中心の教育」という授業を、やっておられて、その中で林先生の事を取り上げられているということを知ってましたから、この際自分が体験したことを喋るだけじゃなくて、星野先生に問題整理して頂いて、そこで考えていったら僕にも役に立つんじゃないかなとこう思ったんです。

「林竹二に出会ってしまった人たち」

米沢：林先生の仕事ということと、それから林先生とはどういう人なんだというその人間、先生の人格そのものについてやっぱり強い関心というか、凄く惹かれるものがあります。その面から言いますと、こういう言い方をしていいかどうか分からないんですが、林先生に出会ってしまった人達という、そういう人達の事が頭に浮かぶんです。その中には授業を聞いた生徒達、子供達というのが沢山いるわけですけれども、ここで出会ってしまった人達というのは、主に教師の事を考えています。これまで自分なりの信念というんでしょうか、自分なりの勉強あるいは自己形成に従って、教育ということをやってきたんだけれども、それがなんか違ってたんだという風に思わざるを得なくなって、自分

は苦しみながら、またそこでいろんな物を発見しながらやっていく、沢山の教師達の事が気になっています。その出会ってしまったということについては、林先生の生涯の研究テーマで、ソクラテスということがあって、お弟子さんの中には先生をソクラテスに譬えるという方おられますけれども、むしろその出会ってしまったという言い方をする場合には、キリスト者の人達がこういう言い方をするとちょっとどう思われるか、それは失礼になるかなと思うんですけれども、僕はイエスに例えたいような思いがあります。で、そのイエス・キリストに出会ってしまうことで、それは本来の本当に定められたるがごとくという風に、本来の生き方なんだと思いますけれども、その本来の生き方としてまだ自分がつかんでいなかった物を見いだして、それはたいていの場合非常に苦しい道になると思うんですけれども、そこにしっかり歩んで行くことになる人達、そういう教師達の事を考えますと、なんかそのイエスになぞらえたいなという風な気もあります。で、そんな風に勝手に思い込んでいるということがはたして、その非常に真近でご覧になっていた竹内先生の目からご覧になった場合には、いやそんなんじゃないんだよという風な事なんかをお聞かせ願えるかもしれないなという思いがあります。

そういう人間の面と切り離せないんですが、じゃあその授業そのものを、勿論授業そのものが活字に起こされて、あるいは写真集になって出ていますけれども、そこでは勿論主役は生徒達ですから、いろんな生徒達の声が書かれている。でも場合によっては、というかまた一方で教師達のいろんな声というものが語られているという文章もあります。その授業そのものが、どういうものであるのか。その本で読んで知るとという風なものではまだつかみきれないようなもの、というようなものを先生が真近でご覧になっていて、どう捉えておられたかという風な事もお話頂けると嬉しいなと思います。それと、僕自身は実際例えば林先生がいろんな場で教えられたというそういう風な教室、あるいは教育の場所を経験するということはおそらく無いだろうと思うんですけれども、ただ大学も基本的に変わらない。大学でもおそらく授業は成立していないと思うし、それから教育の場所として、小、中、ま、高が死んでいて大学は生きているのかと言うと、やっぱりどうもそうはなってないんじゃないかということは思います。そこに身を置いていくとするならば、やはり学生との授業ということを通して、授業そのものを深めていくということは勿論なんですけれども、大学そのものをやっぱり変えていきたい。特にここで四ヶ月学ばして頂いて、いろんなところを見せて頂きますと、自分が今、席を置いているところですけれども、まだまだ変わっていかねばならないというのを沢山持っているように思います。だからそういう面で、今度は自分が本当に一人の教師として、働いていく、働きかけ、働きかけられていくという場合に、やはり林先生、それに重ねるような形で竹内先生のお仕事から色々汲んでいくというか、そういう風な事を念願していますので、その点についてもまた何かお話が頂けたら嬉しい

なと思っています。

竹内：非常にむづかしいところですね、出会ってしまったために変わっていかざるを得なかった教師というようなお話が出ましたね。そこのところは少し考えてみないと、何からお話したらいいかなという風に思いますが。あの、星野先生何か手がかりとして、教師が林先生の授業に出会って、こうということについて何かご感想がありますか？

星野：私はビデオも見ていないし、直接声も聞いていないので。ただ本なんかで人間についての授業だとか、あるいはソクラテスだとかそういう授業しておられるのを一番最初に雑誌で読んだんですね。亡くなられてすぐに出された、総合教育技術（小学館発行）という雑誌で特集があって、今もありますけれども。それで読んだのがどちらかというと最初じゃないか、ま、以前にもそれは本は目にしてましたけれども。だから具体的な場面は全然浮かんでこないんですが、子供とのやり取りなんかを見て、あるいは写真を拝見したりしている中で、私にはいわゆる在来の教師という感じが余り出てこなかったのを覚えていますね。何か普通の人がそこに立って、子供達に話しかけているというか、そんなことが今ちらっとお話聞きながら思い浮かんできました。大学の先生ということはまずわからないし、何か教師がそこに立って子供達に何かしているのではどうもないなという感じ。よく本にも書かれてますけれども、先生は子供達に沢山お話をなさいますよね。決して子供達にどんどん喋らせるのではなくて、沢山お話をしておられますし、ただお話をしておられる、その間に子供達の発言が、入っている、子供達にうまく求めていかれる。うまく話をしていかれると言ったらいいのかな。何か偉い先生がそこにいて何かしているんだったら、きっと子供達はそういう反応をしないだろうと思うんですけれども。やっぱりそうではないから子供達は素直にどんどん反応していっているような感じがしちゃうんです。その時沢山喋っておられても、いわゆる在来の先生がお話しているのとはやっぱり違う。少なくとも子供達に入っていっている。子供というのはやっぱり本能的にというのか、なにか違った物を感じて引き込まれていってる様な、そういう気配を感じます。その辺がだから竹内先生がお付き合いをしておられて、私なんかはちょっとお聞きしたいというのかな。だからどんな風に見えると言うか、私は私なりの一つの見方でしか言ってませんから、どんな人なのかなというのか、それはきっと私の想像では、どうなんでしょう、どっかで変わるという人ではないんじゃないかと、いつでも同じ様なものがすーっとごく日常的に動いておられるんじゃないかなという風に想像してしまいます。お若いときはどうか知りませんですけど、宮城教育大においでになって、いろんな事をされてるときから何かそういう姿勢が一貫してあるのかなと思ったりもしますけれども。

竹内：あまり、米沢さんの質問に義理堅く答えようとするとかえっていけないのかもしれないんだけれども。今星野先生の言われたので少しずつ思いだして

みた。湊川高校へ初めて授業に入った後で、あそこの西田氏が確か言ったのは、とにかく生徒達が今までとにかく荒くれていてどうしようもなかった。つまり教師の言うことなんかまず聞いてないような連中が、林先生の授業に入って、一時間なり二時間のあいだじーっと聞くわけでしょ？その時にこれは人柄の良さとかそういう様なことではないなと思ったというのが第一に彼の言葉にあるんです。それでは何だということはなかなかそれは言葉に出てこない。だけどもその先に、何か自分達が学校で授業という形で教えようとしていることとぜんぜんなんか違うことが起こっていると。ということに対する驚きが大きいので、それをいったいどういう風に考えて、それに対して自分達がどう向かったらいいのかということが問題だった。それはそれぞれの人がそれぞれなりに取り組むのであって、本質はこうだと一言で言えるような事ではどうもない。それについておぼろげなことは後で私は私なりに申し上げるけれども。ですから、林先生が生徒と向かい合ったのを見て、こういう深さで生徒達と向き合わなければいけないんだということについて、自分が出来るか出来ないかは別にして、とにかく何か直感的に感じたことがあって、自分もそれに学んで生徒と深いところでつき合おうと覚悟した人がいるということですね。それをとにかく自分達なりにずっと続けている人達がいる。それからそういう風にその時思ったんだけれども、やっている内に訳が分からなくなって、ちょっとあれは違うんじゃないかというので、どんどん離れていっちゃった人もある。これはもう沢山いるわけです。それからもう一つは授業そのものの様子を見ていて、抵抗感の方が大きいと。あれでは学校の授業とは言えないんじゃないかという風な人もある。

この間沖縄に行きまして、久茂地小学校の元校長で、林先生を呼んだ安里さんという方が尋ねてこられたんです。話しているうちに、あの映画の中のビーバーの話が出てきました。この本にあるぽかーっという顔をして、小学校三年の時に先生の授業を受けたこの子、ビーバーちゃんといわれてた子を、先生は非常にこの時感心された。ところが土地の人から言うとこれはまあ平凡な子で別にどうってことない。それが中学から高校辺りになってぐんぐん変わってきて、この子のお父さんは小児科医なんだそうですが、その高校から初めて、本土の国立大学東北大学の医学部へ行って、今小児科医の卵。大学院にいるんですかね。回りの人がびっくり仰天して、へー自分達にはまるで見えなかったけれども、一体林さんは何をあの子の中にみていたんだろうという話をしてるんだという話を聞いたんです。林先生がこの子の素質を見抜いたのか、この子が林先生に出会って、何かがある時期から形を持って動き始めたと言うことか、そういうことはこの子と会って丁寧に話してみなければわからないことだと思うんですけれども。そういうことはあるようには思うんです。

私の妻なんかは今日少し話しあったんだけれども、映画や本はみている。それでその当時は反発したりなんかすることが沢山あったらしいんです。あの頃

私の回りの教師達も林さんの映画を見たり、本を読んで、反発する人達もいて、その反発の一つのポイントは、林さんが人間について言うときに人間とビーバー、あるいは動物とは何が違うかという言い方をする。そういう捉え方自体に対する抵抗があるわけです。人間というものを特別なものに考えるのはなんだという、そういう考え方が人間の独善主義というか、現代のこういう人間の行き詰まりをもたらしているんだという風に思って反発するといったような人達もかなりいたわけです。動物と人間は生物としてつながりのものとしてとらえるという－自然科学人間視が人間の意味を主体的にとらえようとする立場と対立するそういう様なこともあったんだけれども。しかし、今になって一番思うことは、生きるとは学びつづけることだということを自分は林先生からひびきあうものとして受け取ったように思うと言ってました。学ぶことは変わることだという風に言われた。それが自分の中に一番残っている。今になって思ってみるとやっぱり凄いなあと思うということを言ってました。だからいろんなその時反発したのが後になってからこうなるとか、そういうことをひっくるめていろんな問題がそこにはあるように思うんです。

で、うまく言えないんだけれども、ポイントの一つは、星野先生が言われた、教師という感じがしなかったという、その事が一つある。それが非常に厄介というか、二重の意味があって、一つは、僕なんかが言うと、僕は教育界の外の人間だったから、まさにこれは林先生であるような話、私は生涯に先生という言い方を自分がする人を二人だけもっているのです。一人は岡倉士朗先生で、もう一人は林竹二先生。だから僕は最初は林さん林さんと言ってたんです。ある日仙台のお宅へ行って、今日から先生と呼ばせて下さいと言って、それから林先生と言うようになったんだけれども。私なんかは逆に外からきた人間だから、教師というか、そういうもののある典型と言いますか、そういうものとして、林先生をみたという部分があります。

だけども星野さんが言われているみたいに、あれは日本で言う教師として立っているというよりは、一人の人間として話しかけているという言い方の方が正確だろうと思います。その事はとても難しいことで、ずっと僕はみているんだけれども、人間中心の教育という言葉があるわけで、そういうことを目指している先生方も沢山いるし、そういう名前のついたグループもありますね。そういうのを見ているときにどっか少し違うなと思うのは、教師としての職分の中で人間的なことを考えるという姿勢という風に僕にはどうしても見えるところがあるんです。その教師という職分を全部とっぱらっちゃって、一人の人間として子供に向かったら何が出て来るかということと、教師という職分は無意識にちゃんと守っていて、その中で人間的なことを考えるということは、当人にとっては非常に自覚しにくいことだけれども、外からみていると非常に違うところがある。いま言葉でなかなか言いきれないけれども。林先生はずっと大学におられて、講義された方で、それがどうして、なんて言うのかな、教師とい

うことではなくて人間として喋っているという風になったのかということは、多分哲学という学問はそういうもんだろうという風にしか今の所僕は言えないんだけれども。それは一つの大事なことのような気がしている。

星野：テレビでありましたよね。今聞きながらテレビを思い出したんですけれども。なんて言うのかな、林先生はやっぱり大先生なんですよね。少なくとも大先生、超大先生でしょ、やっぱり。でもそんな感じは全くしないというのか、何かただのおじいちゃんがそばに来ているという。

竹内：かなり晩年でそんなに授業にはいっていけなくなった頃……。

星野：奥さんが一緒にずっと付いて歩いてられたんですが。

竹内：一回脳梗塞で倒れて復活なさった後ですよね、確か。かなり体力的にも衰えてらした。

星野：それもあったのかも分かりませんが、私は自分でも片方で人間関係のトレーニングをやりますから、それは、Tグループなんかでも自分の目標にもしている部分なんですけれども。やっぱりただの人と言ったらいいのかな、本当にただの人にその場でどうなれるのか、なれないのか。そんなもの、意識できる問題ではないと思うんです。そのまま、すっとなれている状況が、きっと、そんなものをオーバーラップして見ていたと言うのかな、なんか本当にただの人ではないんですけれども、やっぱりただの人がそこにいると言うような。だからテレビに出ておられても、テレビに向かって声を掛けたくなるような感じがするのです。それはきっとその人が作られてきたと言ったらいいのか、自分でお作りになったんでしょうけれども。それに対しては、やっぱり周りが敏感に反応できるし、子供達は枠組がありませんから、ある意味で、そのまますっと入ってこられるけれども、教師連中にとっては非常に枠組の強い人がおりますし、これはいろんな自分の物をしっかり持っておられるから、それでみるとやっぱりこれは何だと、極端に何だということになっちゃうのがあたりまえですよね、むしろ。それだけに自分の枠組に、もし気づけた人がいたとしたら、その人は逆にがらっと変わっちゃうんだろうなと思います。今、変わる変わらんという話が出てましたけれども。もとのままで林先生を見ると、きっと、それは極端に言うと異様なものにうつっちゃうということでしょうね。そして今度は逆に自分を守ろうとしますから、余計排除するような事になるかもしれないなということを今も聞きながら思いました。変る、ということは、結局今までの自分の生き方を使い果してもう次へ行くしか仕方がない、というところに追い詰められたもののみに起こることだから。変ろうと思ってもやることは自分を守ることしかできないということはよくあることですから。

「湊川で起ったこと」

竹内：湊川へ林先生が入られたのは、最初にあそこの教師達を相手に講演をし

た。その場ですぐに湊川の教師集団のリーダーだった西田（秀秋）さんが授業に来て下さいということで行かれた訳です。僕はその時沖縄に一緒に行ってまして、大阪空港で別れちゃったんです。あん時は惜しいことしたなあ。まあそういうとこがとろいなあ、一緒に行けば良かったんですが。そうしたら電話がかかってきて、授業行ってきましたよ。非常に興奮されていて、一月後にまた入るんだが、一緒に入りませんかという話なんです。はあ？僕はそもそも教師じゃないし、とか言って、とにかくあの時には他に斎藤喜博さんと、もう一人呼ばれたんです。林先生は自分の授業をするだけじゃなくて、今まで自分が見て信頼できると思った人を呼んで、今までそういう教育界の動きやなんかに触れなかった生徒達にその授業を受けさせようとしたわけでしょう。そして、最後に僕は行ったのかな。ところがあそこの解放教育研究会の教師達と斎藤さんの間に微妙なずれが出てきた。その時私は非常に具合いが悪くて、耳が聞こえなくなってまして、耳の医者へ二日ばかり入院して、それでなんとか聞こえるようになって戻ってきて、そして林先生と斎藤さんと三人でホテルで会ったんです。斎藤さんという人は非常に神経質な人で、自分の授業は余り人にみせないということが聞こえてたんで、僕も挨拶して、「先生は大変気むずかしいと言っては失礼だけれども、簡単には授業を見せていただけないそうで」と言ったら、「いやあんたならいいですよ」と言って下さって「はあ？」とか言ったら、僕の本を読んでおられて、要するに教師達は自分の腹はちっとも割らないで、こっちから適当にうまいとこを盗み取ろうという目付きで授業に来るから、そういうのは駄目だ。ヘソを見せろと私は言うんだ。あなたは初めからそういうところが根っから開いているからいいんだと。そうしたら林先生が、「ヘソどころか腹わたまで出してる。」と言ってははは、と笑われた。まあそんなことがあって、とにかく授業を見にきてもよろしいという話になった。

で、次の日に斎藤さんが授業をしているところへちょっと遅れて行ったんです。実に僕は面白かったんですが、体操の授業をやってたんですよ。あれは剣道場かなんかだったんじゃないかと思うんですけれども、要するにまず行進とかから始めて前転するときには両手を、いいかげんにふぁっとついちゃいけない。両手の平をちゃんと床についてこうやってと一つ一つ斎藤さんはやってみせるわけです。みんなが転がったりなんか一つづつやっているのを見てて、ああこの人は校長さんやってるわけだけれども、一つ一つの事を全部自分の体でやってみて、その事が土台になって子供を見ているなあということがよく分かって僕は非常に感心したんです。ところが高校生ですからね、不満があるわけです。スポーツでもやればおもろいのに何でこんな事をやるんだという。それでぶーぶー言っている奴がいるわけ。そういう奴にまあやって見ろという風に関わっているのをみていると、一つ一つの事柄に対して実によく自分の体を通してわかり抜いていて、それでそれを伝えてるということと、生徒達を、どう言ったらいいのかなあ、そういう自分のイメージなりなんなりに引き込んで行く力

がまことに力強い。やっぱりこの人は随分教育者として力のある人だなあと私は感心してみてた訳です。だからぶーぶーいいながらみんなやるわけだ。

ところが終わり頃になって、並んでいる奴の中で一人「幼稚園みたいなことやらすな！」と言った。そうしたら斎藤さんがキッとなって「あんたそう言うけれども、しかしこのことは大事なことなんやで。」でそこはいいんですがね、「例えば自分が東京大学で授業しても、東京大学の教授やなんかという一流の人達がちゃんとこうやって一緒に行進をして一緒に勉強してるんだ」という言い方をしたんです。聞いた途端に、いかんなという感じがぱっと僕に響いた。これは言うてはいかんことばや、斎藤さんはなんでこれをここで言うんかなあという気がした。途端にすーっと白けたんです、生徒達が。それで、それまでなんかかんか言いながら「こうか？」とか言いながら頭ついて前に転がったりしていた奴が、すっとなげやりになった。そうしたら斎藤さんが、もう一つ声を励まして、もう一つやろうと。

その気合いみたいな物が凄くて、やっぱり生徒は引っ張られて行くわけです。ところがその時に気が付いてみると部屋の隅っこに一人いる、（後で話に出て来るんですが、私の仲良くなった女番長がいて）それが膝をかかえて座り込んだまま上目づかいでじーっとにらんだまま動かない。その有様を後で私は毛を逆だてた山猫みたいだったと言ったのですが。終わった後私は生徒達と一緒に教室を出かけた。すると斎藤さんがその女の子に何か言っている。彼女は食いつきそうな顔で何か言っている。これから後は、林先生から聞いたんだけれども、「あなたなんで自分の授業受けないんだ。」と斎藤さんが問いつめた。そしたら「あんたそんな偉い人なんか。もう二度とこんでくれ」とぷっと言ったっきりにらみつけた、という。そっから先は僕は見なかったんだけれども、この本の中に出てくる朴君という生徒がそばで聞いていた。彼は身体虚弱児ということで授業の時に五分と座っていられない、林先生の授業でも最初、机につんのめってた。それがだんだん身体が立ってきてずっと授業を聞くようになって、僕が知っている、二年か三年の間に、１８才になってたのに１０cm背が伸びたんですよ。そういう人がいた。それがね、戸口の所にスリッパを揃えて、斎藤さんに「どうぞ」と言った。出ていってくれということです。

私は、見て、聞いて非常に複雑な思いを持ったんですね。教育者としての斎藤さんの力量と、斎藤さんが当然と思い込んでいる、そこで権威を持ちうる普通の教育の体系から全くはじきだされた青年達。多くが被差別部落の出身ですが、彼らにとってあの言葉がどれほどやりきれないものであるかについて、斎藤さんほどの人がそんなに分からないのかと思った。斎藤さんというような優れた人、その頃は授業の神様みたいに思われてましたから、周りから持ち上げられてそうなったのかもしれないけれども、ある権威主義から抜けられない。これは教えるものの業（ごう）かと思いました。斎藤さんは、教師達と喧嘩になりましてね。その晩歓迎の宴みたいなものがあったんですけれども、その席

上で、かなり激しいやりとり、怒鳴り合いに近くなって、ついに斎藤さんはそれっきり授業に来ることはなかったんですけれども。今だから言えるけれど。で、その晩、林先生が、くたびれ果てて部屋にいるわけ。僕が呼ばれていって話した。奥さんがいて、林先生がため息をついて、「斎藤さんは前はああではなかったと思うがなあ」と言ったら、奥さんが「前もおんなじですよ。あなたが見えなかっただけですよ。」これは厳しい奥さんだなあと、僕は驚きました。

湊川の生徒達が教師というものを見る目というのは、本当は一般に生徒というものが教師を見る時とは、どっかで感じているんだけれども、感じないようにしているというか、そういうものをぱっと表へ出すというか。だからあそこの教師達にとっては、林先生と出会うと言うよりも、林先生と生徒がぱっと同じ世界で出会っているところに触れるという事が決定的なんですよ。その時に自分がどういう風にそこで弾かれるか、入れるかということの弁別みたいなものが非常にはっきりしていて、一所懸命そこで努力している教師でも、生徒の方からもう決定的に「あかん」と言って弾かれっぱなしで、いられなくなった者もいるし。私はその時林先生と一緒に交代で授業をやったんだけれども、次の日の朝に、その女番長に西田さんが聞いたんだそうです。「昨日の先生はどうやった」と言ったら「ああいう先生ばっかりおりゃいいんじゃ」と言われたという。そういうのを林先生経由で聞かされて、やれやれとほっとした。それからその子は僕の授業というと、心配だったんじゃないかと思うんだけれども、他の授業の時でも時々入ってきて支えてくれるというか、女番長というのはなかなか大したもので、男の連中がわいわいやっててても、ちろっとみると、「ん？」とかいって、さーっと静かになるんですね。なんかそういうような気迫があって、一番激しいところと、さっと林先生と結び付くところとが。

星野：そういう時の林先生の子供達との接し方というのは具体的に言うとどういう風なんですか？

竹内：ただにこにこしている。授業をするでしょ、はじめの頃は心配だから、教師の連中が一所懸命「みんな今度の先生はな、偉い先生なんやからちゃんとせいよ」とやって、まわりに立ってるわけだ。で礼をして「こんにちは、私は林です。」と話始めるでしょ。生徒達は今度の先生はちょっとちゃうらしいなあというような顔をして見ているわけ。それで人間についての話でビーバーの話なんかをし始める。そして、ふっと質問しますね。そうすると、「分からん」「分からなくてもいいからいま考えてみたらどうなる？」つまり分からないとかなんとか答えたときに次に行かない、決して。その子供がちゃんと話をして答えるまで、にこにこしとったりするんだけれども、絶対にきちっとした答えを引き出すまで退かない。それがかなりはっきり生徒に分かるんじゃないかと思う。これが一つ。それからもう一つ。いつも授業にきてないような荒くれがおるわけです。ゴンタが呼ばれて来ているわけだ。今日はちょっと特別だから来いということで。そうすると連中は初めはなんで俺がここにおらなきゃなら

んというんで、顎に手を掛けてこうやってるみたいなのが、段々段々姿勢が変わってくるということもあって、突然質問したり、「先生の言うことはちょっとむずかしうてわからんわ」みたいなことをぱっと言ったりする。「ほーわからんか。それじゃあどういうところがわからん」というので話しに入っていくとか。というような事もありますが。

僕が今そういうことを思い出せる話は、こんな事があったな。田中正造の話をされたんですよ。田中正造の話というのはまた私と因縁があるんですが。「田中正造の授業をなぜされんのですか？」と言って。「はーなるほどなあ」と言われたのをきっかけにするようになったんだけれども。その何回目かの時に、というのは学年が違いますから－まず谷中村というのはどういう所かということを説明するのに輪中の話を詳しくしましてね、木曾川や長良川の輪中ですね、それと谷中村は似ているんだということから入っていったんですね。「田中正造は谷中村に残った人達の中に裸一貫で入って行った。それで何をしたかというと、夜遅くまで膝突き合わせてその人達がどんな事を考えているか聞いとった。」という話をした訳です。官憲が次から次に妨害にくるんだけれども、言うことをきかんかったみたいな話をしたら、「そら意地やな」と生徒がが言うわけだ。すると、先生はキッとなって「意地じゃない。意地と言ってはいかん。」と言うんです。「ただの意地のはり比べとは違う。かたっぽは権力を握っていて、警察の力などを使って村を壊したりする。かたっぽは何の力もない。そのものがいうことをきかんということはただの意地のはり比べとは違うんだ」と。そういうところが林先生の後へ退かないところで、生徒達がふうんとうなって、そうかあと言うことになる。ところがずっとそういう話をしている内に生徒の中で「いや、それはな、一所懸命村の人の話聞いとったかもしらんけどな、代議士までやった人やからな、結局のところ、そらな、本当に自分の身にこたえることはあらへん。調子のいいこと聞いとったんとちゃうか」というのがでてくる。林先生もちょっと一瞬棒立ちになりますよね。「いや、そうではない。」と言ってもその次に生徒達にどういう風にそれを説得するかやっぱり一瞬はっとするくらいに棒立ちになる。やっぱり真剣勝負です。もう一回話を始める。生徒達がふんふんふんふん。「じゃあなあ」とまた問いかけが出る。授業といっても、こういう事を教えなければいかんとか、この時間の間でここまでの事はなんとか生徒達にちゃんと伝えておこうとか、そういう様なこととはまるで違う。そのことは繰り返し林先生自身言われたことですけれども。

星野：やっぱり、ストレートに前にいる子供にものすごく関心を持っておられるというのか、中味ではないですよね、今話聞いてましても。中味がどうこうではなくて、そこに生きて存在している、大げさに言えばその人に自分が真正直に、だから戸惑われることがあってもいいだろうと思うし、むしろ「えっ」と棒立ちになることは正直に相手に写ってるわけですからね。

竹内：「えっ」と思うとね、生徒達の方で「やったあ」と思うわけで、「どう

出るかなあ」とこうなって来るんですね。

星野：その辺がやっぱり子供達にはちゃんと写っているわけで、この子供達は正直に返して来るからわかるのだけど、普通は子供は返しませんからね。今の子供はちゃんと相手に合わすように、そこで感心する格好してみたりとか、本当にそうだと思うんですよね。ところが今この湊川の子供達はそれを正直にやっぱり返してきている。そうすると戸惑う姿はそのまま写ってるはずだから、それでかえって安心してしまうというか。それはやっぱり聞こうという姿勢になる。「ちょっとこれは、おもしろそうだぞ。おもろい話ありそうだぞ。」おもろいというのは、一般的に面白いんじゃなくて自分にとって面白いというのか、関心持てそうなところで、きっとそういう事が起こっているんでしょうね。ちょっとした一言の声の掛け方にしても。

「ドクサの吟味」

竹内：はい。ただその場合に、林先生には、かなりはっきりとした、教師達と違った方法論があった。「ドクサ（ｄｏｘａ）－臆見、思いこみ－の吟味」ということを繰り返し林先生言われますけれども。生徒の発言をきちっと問い返していく。今言われた通りで、ちょっとでも、さっきの話で言うと「意地や」と言うと「いや意地と言ってはいかん」という風になります。小学校なんかだと成績のいい子は、例えばビーバーの絵だと「ビーバーだ、ビーバーだ」と言う。すると「なんでビーバーと分かる？」ということになるわけで。つまり初めに本やなんかで知っていて自分の中になんの疑問もなしに持っているイメージは、一つ一つそれをついてひっくり返していくということをはっきり意識してやっておられたという風に思うんです。ただ、星野先生の話を聞いていて、「はてな？」と思ったのは、例えば大勢いるときに、「君どう思う」とこう問いかけるでしょ？その「君どう思う」がいったいどういう人にいくのかということですね。

と言うのは、これは林先生の場合ではなくて、僕の経験ですが、初めて僕が林先生に呼ばれて行って、湊川で授業をしたときには、体育館で話かけのレッスンをやったんです。二年生と三年生が全部いたのかな。僕がまん中に出て行って、「これからこういう事をやってみますから」と言った。「誰か出てこないか」と言ったって誰も出てこないんです。見渡して、ふと「あんた出てこないか」と言うと、にやっとして「何で俺が出てくんだ」なんてぶつぶつ言いながらそれでも出てくる。「あんたどうや」というと皆出て来るわけです。とにかくぽつりぽつりと。それで一番最後に僕は目の前になんか可愛らしい女の子がいるので、「ちょっと出てこんか」と言ったら、「ん？」とかいってにやっとしてでくる。授業の後で解放教育研究会の当時の会長をしてらした方が、「竹内先生ね、今日先生が指名した連中というのはいったいどんな連中か知っていて指名

したのか」と言うんです。「いや、何にも知らない。ただこうやって見ていて、ああこいつはおもしろそうやなあと思うから指名した」と言ったら、「あれは皆名うてのゴンタばっかりや」と言うんです。「何でああ次から次へゴンタばっかり選ぶんやろう。教師達が手に負えなくて困っている連中ばっかり選んだ」と言うんです。それでどうなのかと思ってると、みんな出ていくのでビックリ。その一番最後が女番長だったんです。ところがこっちからみると全然ゴンタという風には思わない。なんか中で動いているものがはっきりしているというか。後で写真を見てみるとなるほどそうなんです。ゴンタばっかりとは言えないが、ちょっとひねくれてる奴とかそれから非常に大真面目とかいうのもいますけどね。確かにゴンタが大勢いるわけです。尼工で暴走族のリーダーだった青年が林先生の授業に遅れて入ってきて、そのまんま坐りこむ。そして、突然発言したやり取りがどっかに載っていると思いますけれども。目の合い方というか一瞬の出会いみたいなのがあるんですね。なんか本当に皆からだ全体で生きているというか、動いているものがあるわけです。で、教師とは逆にそういうところを逃げようとしているのかも知れないと思う。

だから、斎藤さんの授業を見ていると、斎藤さんの経験と引出し方のうまさとか、子供達を動かしていく力とかというものをよく感じる。林先生の場合は逆ですよね。人一人と話をしていくだけの事だと。その違いみたいなものは僕には非常に大きいですね。多分斎藤さんは、日本の優れた教師の授業の仕方の一つの典型だろうと思いますけれども。

米沢：やはり、斎藤先生の場合はその技術、アートという非常に洗練された、その人の人格とか経験とか結び付けて、その斎藤先生なしではできないというような面があるとしたら、それはまあ芸術かも知れませんですけれども。技術であり芸術であれ、それの洗練される形というのは多分あると思うんですが、そういうところでは、どうしても生徒が主人公になるという風なことは起こり得ない。やはりそこでは教師が存分に自分の力量を発揮するという場にはなっても、そこで何か起こるということは出てこないんじゃないかなあ。

竹内：そう言いきれるかどうかということは僕には分かりません。斎藤さんの事は僕はそんなによく会ってないし、境小学校だったかの校長だった時、記録の映画があります。映画見たときにかなり抵抗感が私にはありました。だけどそれはどうも斎藤さんのやってることに対しての抵抗感というよりは、むしろその映画監督がそういう風に撮ったということに対する抵抗感だったようです。私も演出家だから見えるんです、演出家のねらいが。斎藤さんという人は、別の視点から撮ったら全然別の姿が出て来る筈なのが、こういう狙いにしぼって撮ったんだなという感じがかなりありました。一口で言えば集団主義的な教育に対する賛歌みたいな形で映画が出来ていたと思うので。

ただ、どうなんでしょうね。星野先生。僕は１９６０年代の教育というのは、戦後ずっと民主教育だとやってきたけれども色々な観念的なパターンが固まっ

てきちゃったりしたのを、６０年代になって新しい教育運動が行われなければいけないという風に転換してきた。それは社会的に言えば高度成長時代ですけれども、それとの連関を僕は充分に言葉で言いきることはできないけれども。その時の代表選手が、遠山啓さんと斎藤さんのような気がするんです。要するに非常に観念的に民主主義というものを教え込もうとしていたのに対して、授業内容そのものをもっと本当に子供達にとってどういうものであるかということを考え直さなければいけないと。斎藤さんの場合は国語が主ですし、遠山さんは算数の水道方式です。僕は遠山さんの事をあんまり言う資格無いけれども、しかしあれは非常に大事な仕事だったと思うんです。一つ一つの教科について、そういう起爆剤みたいな物を打ち出した。

ところが林先生の場合は、本当の意味が出て来るのは７０年代から８０年代にかけてですね。一つ一つの授業の問題よりは、もう一つ全体的に全人間的に一体何が問題なのかということを提起されたという風に僕は考えていいんじゃないかと漠然と思っているわけです。どうなんでしょうかね。

星野：どうでしょう。私は全然専門外で分かりませんですけれども。今聞いていて思うのは、やっぱり日本の先生の育て方というのがそういう傾向を持っているからなのかなと。例えば大学で教員免許状を採ろうと思ったら、教科教育法を採りますよね。その方面の素人として僕は不思議なんです。英語の教科教育法と国語のそれとはどう違うのか。僕はそう思っちゃうんですけれども。でもやっている先生は全然違ったことをやっているという発想で、おそらく違ったことをやっていないと思うんです。でもそんなもんじゃないだろうと私なんか思っちゃうんです。だから今おっしゃるように例えば算数学、あるいは国語という風な中でのある種の教え方、そういうものが伝統的にずっと流れがあって、その中でそれをどう変えていくかというところで、もう一歩、ということになる。そうすると斎藤先生が国語を離れた段階でどのようなことが出来るのか。その辺の広がりが・・・。

竹内：体育で歌もかなりやってらした。

星野：だからその辺の広がり、広がりというか、国語を教える前にその前にあるものは一体何なのか、というその辺の所に光を当てるか当てないのか。おそらく斎藤先生なんかきっと当てられてるんだろうと思うんですよ。それはやっぱりその道のある意味の達人でしょうから、おそらく当てられてるんだろうと思う。多くの教師にとってはそれはとても光の当てどころにはならないというところに光を当てていくんだろうという気がします。

竹内：斎藤さんが僕を信用したというのは、一つあったんだ、エピソードが。私が宮城教育大学に集中講義に行ったときに、斎藤さんから指揮を習った人が学生にも教員にもかなり沢山いるわけですよ。僕はよく授業で歌を歌わせるから「ちょっとやってご覧。」あそこの当時助教授だった人にやらしたことがある。「どうもようわからんなあ。変だなあ。何かね、あなたは斎藤さんに習っ

たと言うけども、そういう事で指揮が成り立っていると僕には全然思えないけどね。どうもおかしい。」他の人にやってもらうと、やっぱり納得がいかないわけ。どうも納得いかないなあといったら、ちょっとビデオ見てくれと言われたの。斎藤さんは自分の授業を他の人にみせるというのは非常に慎重な人だそうだから、僕は遠慮したんですけれども。その人が、「そうかなあ。ちょっと斎藤先生がやっている指揮のビデオがあるからみてくれないか。」「ビデオ見て分かるかどうか分からないけれど、とにかく見せていただきましょ」と行ってみた。でも音が悪くて、良くは出てこないんですよ。それでも斎藤さんがどの歌やってるかは分かった。みている内に、「なんだあんたがた斎藤さんに習ったと言うけれど、全然違うじゃないか。」と言ったら「何が違うんだ。」と言うわけ。それで、うまく言えないけれど要するに、僕に言わせれば、斎藤さんはそこに生徒がいて、生徒の中から声とか呼吸だとかがどうでてくるかということに対して、もっと大きくとかこっちへとか働きかけている。あなた達は斎藤さんの真似をして、こういうふうにやれば向こうが変わるもんだと思って一生懸命身振りをしているだけで、それはあんた自分で踊っているだけで、生徒と関係あらへんと言った。そうしたらそれがショックだったらしくて、その人が、文章を書いた。斎藤さんはそれを読んで、私の授業受けたことのない人が私の事がわかっとって、私の所についていた人がわからんというのはどういう事だといって僕の事を信用してくれたという話です。私からみると斎藤さんが現場の教師としてからだ全体で子供に働きかけ苦労して見つけたことはまわりの人たち、いや自分にもよくつかめていなかったのではないか。ただ教授学という方法として説明しようと苦労しただけで。

星野：その辺の処は、しかしどうなのかなあ。私たちが、自分が小学校のときのことを思い出すと、話が飛ぶみたいだけれども。その当時の先生はなんていうのか、どっか違っていたという感じが、やっぱり今の話の関連でいくとするんです。例えば、国語の先生だったかな。戦後小豆島の小学校の校長になって行かれたけれども。集めては話をしてくれるんです。授業じゃないですよね。まさに集まれという感じで昔話をして下さった。髭面の先生で、こう捕まえてその髭で子供のほっぺたをこすってくる。そういう風なことをする先生がやっぱりいたというのかな。身近の処でそんな人がいた記憶があります。だからそこにはテクニカルなものは殆ど感じない。勿論教育はある意味でテクニックがあるんだろうと思うんですけれども。そんな風なものを、なんかそれを越えたところでやっぱり、人がそこにいるというのかな、そんな先生が何人かいた。

「学問――学ぶよろこび」

竹内：それがさっき米沢さんが一番最初に言われた人格の出会いということになると思うんですが。林先生の場合には、だから今日は本当はうまく喋れたら

ばその事をお二人に聞いてみたいと思っていたことなんですけれども。さっき言いましたね、人柄がいいとか悪いとかの問題ではないという。なにかが魂にまっすぐ、魂という言葉を言っていいかどうかわからんけれども、まっすぐにきてそこんところで向かい合っているということは、つまり人間的な接触というか、ヒューマニスティックな意味での接触だけでは足りないなにかがあって、それを林先生は学問という言い方をされたりなんかするわけですけれども。それが僕にはなかなかうまく分からないというか。僕は人間的な接触という意味では、生徒達とぱっとつながれるということがあるんだけれども。それが学問ということになると、僕の中にひどく抵抗感があって。学ぶという言葉になるとかなりわかってくるんだけれども、学ぶということはいったい本当にはどういうことなのかということが、林先生と側でお付き合いしながら何回も討論しながら、僕のなかでやっぱり本当にちゃんとわかっているとはいえないと思うんです。ただ人間的に触れるという問題ではなくて、もう一つ学ぶということに関わる何かが生徒に食いついていって、生徒の方からもそれに食いついて来るというその事がなにかうまく言えたらば意味があるかなと思うんですけれども。

星野：どうなんですか？林先生というのは、どういう言い方したらいいのかな。子供達に何かを教えるということについて非常に興味を持っている人だったんですか？

竹内：教えるというのは？

星野：何か自分の持っているものを与えていくというのかな。あるいは人を、今おっしゃったみたいに、変化させていくというか成長させるというのか、そういうことに興味を持っておられた人なんでしょうか。私はむしろ逆、違うような気がするんですけれどもね。

竹内：今のは非常に答えにくいという気がしますね。

星野：私もはっきりしないまま言っているんですけれども。やっぱり自分が何かをするのではなくて、相手とその場で話をしながら、相手が変化すればそれでいいんじゃないのというくらいの感じというのかな。こちらにある種の使命感みたいなものはあんまり持っておられないような気がするのです。

竹内：それはそうですね。

星野：ところが多くの教師は使命感をどっかで無意識のうちにいだいているというのか。役割からもっといくと使命感になってしまうのですけれども。そんなものがないのかなという感じがちょっと。そういう意味でお聞きしたんですけれども。

竹内：そこはソクラテスに戻った方がいいんじゃないかという感じがする。つまり相手が変わる変わらないということに対して興味が全然無いということではないと思うけれども。その事自体よりもそれが本当のものであるかどうかということを吟味していくという、プロセスそのものを真剣にやっておられた、

子供相手だろうとなんであろうと。という感じがまず第一にするんです。開国の授業だったと思うんですが、今は断片的な記憶でしか言えないが、初めの時は先生もやっぱり改めて色々調べて来るから材料が多いんだよね。多すぎてちょっとこれはと、率直に言うとなるときもあるわけです。まったく勉強し直して来るわけですからね。だからそういう風に言うと伝えたいことが無いということではない。ただ沢山の史実はなんのために述べられるかというと、途中で投げかける質問のためであるわけです。例えば、教科書なんかでは、黒船がくる、ペリーが浦賀にやってきて幕府は大あわてであったという話になっているけれども、実は幕府は一年くらい前からペリーがやって来ることは知っておったということがわかっておる。何で幕府は知っていて何もしなかったんでしょうかというような話になるわけ。もっと単純なことで言うと、海を越えてやってきたんだけれども、いったいどこを回ってきたのかな。というと、後の咸臨丸やなんかの話で皆知識があるもんだから、勉強している奴は皆太平洋だと思っているわけ。いや太平洋を渡ってきたということは当時はあり得ないんだよということで、皆の頭が一回ひっくり返って、それじゃあいったいどうなっている？ずーっと大西洋を回ってアフリカの先っぽの喜望峰を通ってやってくるのだ。そうするとどれくらい日数がかかるか。そんなに苦労して、なんのために日本にやって来るの？という話に子供達の方が追い込まれるというか、なっていきますね。そういう意味で言うと、林先生はまるで子供みたいに単純なところへ自分の発問自体を戻して行く。なんか分かったようなことを教えるのではなくて、全部、本当に単純に考えるとどうしてだろう？と。それを子供に投げかける。子供も一緒にえー？という風に考える。そういう印象があります。それはやっぱりソクラテスがドクサ（ｄｏｘａ）－臆見、思いこみ－の吟味と呼んだこと、あなたそういう風に考えるもとは、あなたにこういう前提があるからじゃないかなあと、ええそう思いますと。その前提というのをよく考えてみるとこうじゃないかなあと、一つ一つ吟味していくという、そういう吟味を子供達と一緒にやっていたというのかな。

星野：さっきおっしゃった学問というのは、私には学問とはこの辺の高いところにしかないように思ってしまうのですが、そうではなくて、子供の中にも学問があるんだという。

竹内：今だから、星野さんがそう言うと、僕はそうですねと言えるんだけれども。その当時はとにかく林先生と、この写真集（授業の中の子どもたち）に対談がのってるんですが、このおしまいの方に林先生が後書を書いてて、それに僕となんべんも対談をやったと。たしか６～７回やってるんです。それを起こすと２０００何百枚くらいになっているのをこれは２００枚足らず、１６０～１７０枚にまとめてる訳です。その時に、「竹内さんの中には学問に対する根深い不信があった」と書いてある訳なんです。僕はそれまでそういう風に自覚してなかったんで、読んでうーんと思った。俺の中にある学問への不信とは一

体なんだろうということが実はよく分からなかったですけれども、そういうのが確かにあるんです。逆に僕は林先生は、やっぱり大正デモクラシーのなかで生まれた方ですねといったら、いやそれはまったくその申し子ですって自分でおっしゃってたのね。大正デモクラシー対戦中派児童のぶつかりあいでね。だから、話は飛びますけれども、学問へ対する不信というのは、僕はね、個人の問題だとは思えないんですね。

星野：私はいわゆる学問をしたことの無い人間だから。ある意味で、極端な言い方をすると研究者馬鹿に見えてしまう。そういう言い方で表現できると思います。研究者馬鹿それだけであって、それを学問と言ってるのは一体なんだという、抽象論。やっぱりそういう傾向がありましたよね。抽象論をしないと、学問とはみられないような傾向があったんじゃないかなという気がしますけれども。その辺がやっぱり何じゃという感じ、でも片方では自分ができてないというある種の劣等感を持ちながらですが。だからできてないというのは、そういう類の物として自分がやっぱり積んで来てないという面がありますね。しかし、実践的にいろんな面で、それは実際にやってるよという自尊心のようなものもあるし。

竹内：その辺に関してはかなり似てるんですけれどもね。

星野：だから、ここへ来てこんな授業をしている中で、その言葉にも全然こだわりは今無いし、こだわってもいないです。ただ、林先生は、今先生は学問とおっしゃったけれども、それはやっぱりなんていうのかなあ、その字の通りなのかなあ、学び問うという、まさにその問うことが学ぶことであり、学ぶことは問うことであるということを本当に実践しておられたのだろうと思うのです。勿論それはソクラテスであり、田中正造さんのような研究記録、そういう物をしっかり持っておられるからこそできる。その辺のコンプレックスは僕なんかありますね。あることについてそのようにやったかというと、やってない部分があって。その辺で勝負できるかということがある。だから領域によるんでしょうけれどもね。

竹内：一つにはそういう学びとることの厳密さみたいなもの、これは確かにあると思うんですね。この厳密さというものは訓練を経なければできないということは、僕は近ごろになってやっと言えるような気がする。これはいわゆる学問的に文献を分析するということだけじゃない。身体のことでも厳密さというものが非常に大事だということが一つあるだろうと思う。そういうことをほったらかしにして、直感的にこうに違いないと思って実践ということをやっちゃうということはたくさんあるわけだから、それを自戒するわけですが。

もう一つ、僕は戦争中からのことを考えると、今学問と言われることは殆どヨーロッパの学問でしょ？すると、ヨーロッパ、あるいは欧米と言ってもいいけれど、そういう学問に対する日本の庶民のある違和感というか、そういうものが僕なんかベースにあったように思いますね。戦争中ですけれども、右翼の

連中が例えば「わが国のことを『この国』とは何事だ」といって法学者なんかを攻撃するというようなことが、僕なんかの周りにあって、そういう右翼の連中の言うことにも納得できないんだけれども、しかしそういう人達が、日本という国はヨーロッパに比べて駄目だという形での分析をすると、自分なんかかなり貧乏な家で育ってきて、戦争中は、企業整備でどんどん職がなくなって、工場へおっぱられてそこで親戚なんかの中年の連中がひーひーいって働いたりなんかして、それで自分の家へ帰ると僕は活字拾ってましたけれども、そういう様なくらしの一方で、なんかヨーロッパ伝来の文化至上主義的な気風の旧制高等学校で、芸術だの学問だの言われても、一体日本の民衆の生活とどういう風につながるんだというような感覚というのはやっぱり今から思うとかなり根深くあって、反発はずいぶん強かったように思います。

それで、もう一つは学び問うというけれども、学び問うというのは対象に付いて勉強するという形になりますよね。そういうふうに方法論はヨーロッパから学んで来てね、その方法論で学び問うていけば、日本の社会も何も色々見えるものはあるだろうと。ところが反面で、そっからずっぽり落とされていく部分があって、そっちの方が非常にぎくしゃくしているけれども、なんか実感みたいなものが沢山あるわけです。逆に言うと自分を、ま、アランという人はプラトンを勉強した人だからそうなるのかもしれないけれども、彼の定義集で、精神というのを引いてみると、精神というのはすべてのものを嘲笑する働きであるとある。自分自身を嘲笑するわけでしょ？とまで言わなくても、自分を吟味するというかたちのことがあまりなくて、原理が向こうからきて、言語が立派にある。こっちには違う原理があるがそれは全然無視されていると感じる。この原理そのものを吟味していくという形になっていないから、いつも異質なものを眺めて、あれは本当は俺の物じゃないと思っている。デモクラシーと言われても、いつもそういう風に思っているということが今から思うと僕にはどうもあるみたいなのね。

その土台には、アメリカ軍に占領されたけどね、占領されたからってしっぽは振らないという感じがどっかにあるんだね。僕は変なことですけれども、あれはだいぶ後、反米的な闘争がだいぶ広がってからだけれども、木下順二さんに妙なことで感心されたことがあるの。「竹内くんというのはなかなか芯が通っているなあ」「なんです？」といったら、タバコをその頃少しは吸ってたんですよ。ラッキーストライクというのがその頃あったでしょ？アメリカ軍の兵隊が皆もってたやつなのね。まっかっかの日の丸みたいのが付いた。「こないだから気がついてたんだけれども、竹内くんという人は絶対ラッキーストライクを吸わない」と言うんです。妙なことで感心されたんだけれども。要するに、「アメリカ軍から、法律なんかできた恩恵というものは否応なしに受けてることはあるんだけれども、しかし明確な抵抗感を持っていて、時々俺はみていてなるほどと思うときがあるんだ」という。僕の方が余り自覚してないから、そ

ういう話を思い出すんだけれども。あれは一種のナショナリズムですかね。これはもう話は論外ですけれども。なんかそういうのがごちゃごちゃにあって、学問というものに対して、林先生なんかが本当に取り組んだそのものに対して、こっちはいつもなんか横目でみては避けていたというか、そういう感じがあるんじゃないかなあと。林先生に言われてからひどく考えたんですね。

星野：どっかに借り物とおっしゃったけれども、本当に日本の学問というのは全部借り物的な要素がある。まあ、あるものについてはそうでないんでしょうけれどもね。私が知っている範囲内では、やっぱりヨーロッパから持ってきた、アメリカから持ってきたという、ま、法律もそうでしょうし、あるいは今の経営学なんかでもそうですよね。どこかから持ってきてああだこうだやってるだけのことであって。それで満足している人も結構いるんでしょうね。そしておそらく林先生が問いかけられたものは、どっかに書いておられるのかもわかりませんけれども、なんて言うのかな、子供に学問する喜びを伝えてるといったらいいのか。それは学問とおっしゃらないだろうけれどもね。本当の学問というのはこういうことなんだよと。

竹内：僕の妻が今朝その事を言いましたね。学ぶことは楽しいことだ。林先生は学ぶことのよろこびを分かちあおうとされたのだろうと。

星野：ああそうですか。やっぱりその事を一生懸命伝えておられるんじゃないでしょうか。だから私たちがどっかで描いている学問とか研究とかということ、それはそれなりに存在価値はあるんだろうけれども、でももう少し違うよという、今こういう形で問いかけられていることがベースにあって、初めて本当の学問というのかな、そこでは一人一人がデータを積み重ねてつくっていく“私の学問”というものがきっとあるんだろうと思います。私の学問を、この人は実際に実践されてんだろうし、その辺の処で、庶民が学問したっていいわけですからね。なにも難しい事を考えずに、毎日の生活だって、データをきちんと集めて正確に物を考えて行動すればいいわけで。一生懸命細かく問いかけながらやっておられる。子供は決して学問とは思わないだろうけれども、そのまま生き方ということを問うておられるんだろうと思うんですけれどもね。その辺が伝わっていくのかなあ、という風に今聞きながら思ってはいますけれどもね。

竹内：林先生は戦争中から二宮尊徳の研究をやっておられたのかな。それから、僕はその辺はよく知りませんが、１９５０年代の終わりくらいから、鶴見俊輔さん達と、日本の近代以前の思考が日本の近代をどの様につちかったか、あるいは発展していったかという問題意識でいろんなテーマで共同研究をされた。そういう問題意識が、いつどの様にでてきたかということについては、私は残念ながらちゃんと問いただしてないんですけれどもね。たしかに学問ということを生活の中での働きとして捉えておられたのでしょう。

星野：これは質問なんですけれども、実際に教育現場にこの先生をどんどん追いやっていったというのは、その積み重ねてこられた学問的な業績とどうつな

がって、どの辺でそんな動きがでてきたんでしょうか。

竹内：整理してみないとわからないんですが、林先生は東北大でソクラテスの教育哲学を研究しておられた。それで教育学部長をされた訳です。その教育学部と宮城師範が一緒になって教育大学を創るというようなときに、基本的には初め林先生は反対だったらしいんですね。ところが学長選挙で、選ばれて行かれた訳ですね。それで、実際の教員養成の問題は多分そこで初めて具体的に取り組まれたんだと思うんだけれども。何年かの後で、教え子が、確か白岩ですよね、教員になった小学校で授業を見て下さいということで行って、それで私にもやらしてくれないかという形になったんだと思うのね、一番最初は。なんか初めの頃はだから皆冷やかし半分で「先生あれが授業ですか？」みたいな言い方をしてた教授とかもあったらしいんです。しかし、そのうちに子供達の感想文が出て来ると、これは？ということになった。林先生の方が非常に驚いて、子供達の中でこういうものが動くのか、ということに、ま、変な言い方すると病みつきになって、それでずっと授業をあちらこちらでやってみるという風になっていった訳です。林先生の言い方だと、初めの頃のテープがあるから聞いてみてくれませんかと言われたことがあります。結局僕は幾つも聞いてないんですが、「要するに、私は人間てなんだろうということを、子供達に繰り返し繰り返し問いかけていただけですよ。そのうちに段々段々この教材だと子供達の中に深いことが起こるということがわかってきて、教材が選ばれてきて、それで今みたいな「人間について」という授業になったんだ」と、こういう言い方をされてましたね。

そのベースには、宮城教育大学の中で研究会みたいなのをやってられたらしいです。「人間はどこまで動物か」とか、人間についていろんな分野の人達を呼んで来て、研究会をやって、そこで、林先生自身が学んだり考えたりしたことを授業の中に取り入れていくというような事もあったようですね。僕に一番単純にわかるのは、ドクサの吟味を子供達に対しても同じようにずっとやっていくと、子供達の中に深いものが表れてくるということについて、先生は確信をもたれたんじゃないかと思います。それを、林先生は、理性という言い方をしたり、美しいものを美しいと感じるような力という風にも言われた。ただこの場合に必ず最後に言われるのは、何かがこうだということがわかるということだけでは、それは知るということじゃないと。わかったときにそれが行動できるということが大事なんだ、そうなったときに初めてそれは本当の知ということになるということを授業の最後には必ず言われた。

「集中ということ」

米沢：授業ということについてお伺いすることになると思いますが、その林先生が、今竹内先生のお言葉で病みつきというような表現をされましたけれども、

その深いものが表れてくる、あるいは深いところで何かが動いて来る。そこにまずそういうことが起こってくる姿として、竹内先生もよくお使いになる集中ということがあると思うんです。と言いますのはこないだの「からだとことばのセミナー」で簡単に言って半分は打ちのめされるような事があって、ただその時に自分がとっていた姿というのを後から振り返ってみますと、写真集に載っているある子供の姿と同じ姿を自分がしていたということに気が付きまして、もしあれが僕にとっての集中であったとすると、その集中というのを実に長いこと経験してこなかったか、あるいは初めてじゃないかという気がしました。ではその集中というのが、どういう時に起こって来るのか、そういう言い方ではちょっとまだ的を外れてしまうような気がするんですけれども、そのいろんな形容を抜きにして、集中というものを林先生は本当によく使われますけれども、集中ということを言うことによって、林先生の著作を読んだり周りで見ている人、教師達に何を教えておられたのか。

別に時間的な物理的なものだけじゃないんですが、なんか一種の切迫感みたいなものがあって、次々次々とやっていかなければならない。例えば一人の生徒の吟味をしていると、じゃあほかの生徒はどうするんだという。例えばそれが授業参観なんかで父兄がいるとしたら、絶対そういう事に文句を言うと思うんです。うちの子はどうしてくれるんだと。そんな風なものがそれを授業ではないんだという言い方にみてしまうような捉え方もそういう処にあると思うんですけれども。そうすると教師はやっぱりこういう事だけやっていていいんだろうか、一つの中に全てがあるんだというような自信はなかなか持てなくて、やっぱりあれもこれもあれもこれもという風にどんどんやらないと、それこそ使命感ですか？星野先生がおっしゃった、それはもうそれに悖るとか自分の本分を果たせないという風な思いに捕らわれて、かえっていろんな事をやりすぎて自分も訳がわからなくなるし、ましてや生徒もどんどんなんか訳がわからなくなっていって、その集中とは程遠いところに行ってしまう。

ただその集中が出て来る条件というのはやっぱりあると思うんです。そういう事を林先生がお話されているということはあるのか。集中が起きているということは大事だと言われますが、その集中が起きて来るということの条件と言いますか、特に教師が心すべき事は？というのは、それこそドクサなんですけれども、集中についての完全な誤解というか、いろいろ「はいはいはいはい」って喋っている奴は全然集中してないんだというあれですよね。それももう子供から大人まで全部当たっていることだと思うんですけれども。とにかく今言葉で申しますと、集中ということがやっぱり非常に気になりますので、それについてなにかお話をと思います。

竹内：この写真集「学ぶこと変わること」の中でも林先生が特におしまいの頃によく挙げられたのはこの写真ですね。これは知恵遅れと言われた人じゃなかったかなあ。「物知りであるということと賢いということ」という、プラトンの

パイドンを元にして、ソクラテスの最後を語った授業で、ソクラテスが死を選んで毒を飲んで死んでゆく振舞いをずっと語っていくわけですが、その後でこの人が三行くらいの感想文を書いたんです。それがソクラテスが自分で死を選んで死んだのは、すかっとしたでも無いけれども、とにかく偉いやっちゃという感じですね。僕にはちょっと意外だった。つまり、死を選ぶというのはどっか悲壮感がつきまとっているんだけれども。その時の彼の表情がこういう深い集中を示している。この授業の時に僕は横にいたんですけれども、ある瞬間からすっと目をつむってずっと聞いていくと、その中で自分なりに、ソクラテスの生きざまと自分というものを突き合わせてるというかそういうことがずっと続くわけ。その時というのは不思議なんでなんと言ったらいいんかなあ。

うまく言えないので、自分の授業の経験を言います。「人が立つこと」という授業をしたことがあって、その時に皆がものすごく集中した。ルナホールでの林先生の授業を思いだしたと後である教師に言われたんで今思いだして話しているんですけれども。人類が哺乳類から段々立ち上がっていったプロセスを、四つん這いから実際にからだを動かしてやってみるわけです。四つ這いの時にはおなかの中の子供はどうなってるかというと、ハンモックに寝てるみたいなもんだ。現に猿の赤ん坊は生めれてからも母猿のお腹に捕まってぶら下がっているけれど、人間の場合にはそうはいかないと。水平だった背骨が垂直になると内臓はみな折り重なって骨盤の方に押し付けられる。胎児も本来仰向きに寝ころんでさえいればよかったものが、逆さまになり、ぎゅーっと背骨の方に押し詰められて大変な苦労だ。出て来るときでも骨盤を割るようにしてものすごく苦労するんだと。だから男は女の人の身体をまず大事にしなければいかんみたいな話をまあいろいろした。

で、その話をしている途中である瞬間にふっとみたらまるで違うんです、皆の目付きが。こっちが喋る度に向こうの身体の中で何かが起こっている。それは僕が喋っていることの深さで起こるんじゃないんだよね。向こうのからだというか、魂の中でどんどんどんどん深くなってゆく。俺はこんなちっぽけなこんなつまらないこと喋っているのに、どうしてあの人達はあんな深さで動いているのだと驚きというか恐さを感じた。必死になって、これじゃあいかんもうちょっとしっかりという風になって喋るんだけれども、結局の処向こうの魂の方が深いんですね。

林先生は僕とは違うけれども、この時の感じを思い起こすと、集中ということはおそろしいことだと思います。つまり、林先生の話が深いから子供達に深い動きが動いて来る、ということはある段階まではそうですけれども、そこから先、いま米沢さんが言われた集中ということが本当に起こって来ると、この人達の魂の中で動いていることが深いのであって、それが次から次へ動いていく。ただこっちが浅くなった途端にそれははねつけられますから、深さを支えていかなくてはならない。その深いというのは何かというと、林先生が言われ

た言葉をその通り使えるかどうかわからんけれども言えば、つまり飢えているわけです。彼らの中で。何か飢えているものがあって、その正確に飢えてるものに触れて来るか、飢えが目覚め追い出されて来るか。何に飢えているかということが動きだしてきたときに、深い集中が生まれるという風に今は言いたい気がします。

結局何に飢えているかということに、さっきおっしゃったような今の教育ということは手がかかっていない。本当に今の僕たちが、僕で言うと身体全体ということになるんですが、魂の底で本当に欲しいものは何なのか、何に渇いているのか、何に飢えているのかということに手がかからずに上の方で一生懸命いろんな物を食べさせようとしてると。林先生に言わせれば、パンをほしがっているものに石を与えているんだという言い方をされるわけです。私自身戦争中から戦後にかけて「飢え」てうろつきまわっていたのですし……いや今までそれは続いているのかも知れない。それはこういうことに飢えているはずだからこういう話をするということではどうもないですね。

星野：こういうことがあるかもわかりませんね。今聞いていて思うのは、竹内さんも結局そうでしょうけれども。集中ということで、あるところから深く相手の魂が動いていくとおっしゃったけれども、人がそうなり得るということを信じておられると言うのかなあ。それがあるんじゃないかなと。それはなにかやっぱり両者に、ま、そこまで言ったら宗教みたいになっちゃうんだけれども、そこまでは言いたくはないんだけれども、何かやっぱり流れているものがあるというのか。

竹内：林先生の場合にはかなりはっきりあったと思うんです。というのは、対談の中でね、「つまり竹内さんが学問というものに深い不信を持っていて、そんなものにだまされるもんかという気持ちでずっといた。その竹内さんは学問というものを考えざるを得ないところへ追いつめていった物はなんだろう」という質問があるわけです。「ちょっと待ってくれ、うまく答えられない」というのであたふたしてやっていて、学ぶことの飢餓感みたいな話があるんですが。「私と竹内さんと少し違うところは竹内さんは一つ一つのふれ合いというような次元で捉えてそこから出発する。私の場合は一人一人の人間の中に根深く潜んでいる原形質としての衝動みたいな物と結び付けて考えるわけです。」こういう言い方をしている。

私はこれを聞いたときに、その二つが違うという風に思ってなかったんです。根強く潜む原形質としての衝動みたいなものに対するこっちの感覚が無かったらば、一つ一つのふれ合いというものが成り立たないじゃないかという風に思っていたわけです。後で考えてみると、今おっしゃったことに関係するんですけれども、林先生の場合それを例えば理性とか、つまり共通の何かというものがあるという風に思ってらした。僕もそういうものが無かったら初めからふれあいが成り立たないんだけれども、やっぱり何か少し違うところがあるんじゃな

いかということを随分考えていたんです。私はからだにおいて共通の共生するものがある、と感じていた。林先生は後で共通のものを、〈たから〉と呼ばれ、可能性と言うだけでは足りないとつけ加えられて、また〈佛性〉という言い方もされています。今の私には、マザー・テレサが死にゆく人や貧しい人にキリストを見るという姿勢と共通のものを感じますが。

林先生の場合にはドクサを吟味していってここから先に行ったときに初めて学問への飢餓感とか、そういう様なものが動き始めるということについて、かなりはっきり考えてられたんじゃないかなと思いますね。今そういう風に質問されるからわかるんだけれども、例えばプラトンなんかを読んでいて、僕らで言うと理性的なやりとりだとばっかり思っているけれども、そういう段階じゃあすまないことが出てきますよね、多分そういう感覚とつながっているんじゃないかなあという気がします。

それで、この先どういう風に僕が問題意識を持ったかというと、私はドクサの吟味を、私は身体においてそれをやっていくという感じがあるんです。しかしどうも自分がやっていることは「人間とは何か」ということ。「人間である」ということがそこに成り立っていくということをやっている。林先生は「人間である」ではなくて、「人間になる」ということを言っておられる。俺は「人間になる」ということはどういう事なのかが、私の課題であろうという風に思ったのです。この後で神戸の解放教育研究会で喋った時、タイトル自体が「人間であることと人間になること」だった訳です。それがずっと私の公案になっている。

それで今思うのは、私は人間の中に自然というものを発見していく作業をしてきたという言い方ができるかと思うんですが、その人間の中にある自然、あるいは自然としての人間ということを考えたときに、その自然というものは、勿論文化であるわけです。ただの自然というのはあるわけはない。また発見した、という行為自体が意識において文化となる。文化としての自然ですね。それは殆ど慣習と同じになってくる。そうすると、その慣習であるところの身体ですね、生活と言ってもいい。その慣習であるところの身体というものは、このままでは生きられないと感じる瞬間がある。つまりそれが身体におけるドクサの吟味だと思うんですね。日本でやってると、どうしても自然としての人間を発見するということになって来やすいんだけれども、どうもそうではないんじゃないか。そういう自然であるところの人間を吟味する。自然であるまんまの人間では生きられない身体というものが敏感に明確になってきて、その過去の慣習になっている身体というものを否定していくと言うか、そういう繰り返しの中で人間になっていくということがあるんじゃないか。それをアランのように精神という言葉で名付けてもいいけれど、何かそういう物ではないかという風に、今林先生から受け継いだものを一所懸命考えてる。

星野：林先生なんかは、例えば竹内先生のそういう一つの考え方の基盤にある

もの、そして実際に実践されてることをどんな風にみておられたんですか？それはあんまりお話されたことはないんですか？
竹内：どうなんでしょうかね。僕の方から僕のやってることをどう見ますかという風に質問したことはあんまりないんですけれども。
星野：でも御一緒にしておられたということはなにか感じられることがあるんだろうし。

「田中正造に学ぶ」

竹内：僕が林先生と知合いになったきっかけは実は教育の問題じゃないのね。１９６２年かなあ、田中正造の芝居をやった訳です。ところがその頃は資料がまるでないんですよ。金子光晴の弟であるなんて小説家だったっけ。渡良瀬川という小説がありましてね、そのくらいがせいぜいで、戯曲は古いのだと明治から大正くらいにかけて１０本くらいあるんですが、みんな見るに耐えない。で、どうしたらいいかなあといろいろ資料を調べて木下尚江の田中正造伝かな？あたりを読んで一生懸命考えているときに、思想の科学に「抵抗の根」という林先生の論文が載ったんです。田中正造というものを再評価するたぶん最初の論文。それを読んで僕は手紙を出したんです。どんな手紙を書いたか全然覚えてないんだけれども。林先生が答えてくれて、それからいろいろ手配してくれて、現地へ役者達がみんな見学に行ったりする。林先生はそういう点では非常に行動的な人で、ただ私は東京を離れられない、その時期、もう演出者が上演間際といったらものすごい忙しさで、台本は遅れているし、で僕はとうとう行けなかったんですが、後者たちは谷中から正造が息を引きとった庭田宅までずっと回ってきた。それで林先生は舞台稽古を見に来て下さったりした。

その直後にぶどうの会が解散したのです。竹内がこわしたんだという話になっているんだけれども。その時、林先生が仙台から出てこられたんですよ。会いたいというから、ある人の立会いであったらば、「ぶどうの会が解散するということは残念なことである。よく聞いてみると、あれは竹内と木下、山本が仲直りすればいいのだという話であるけれども、私に任せてもらえますか？」とこういう話なんです。困惑しちゃって。「私の方はお任せしていいけれどもただ向こうはお任せしないでしょう。」という話をしたんだけれども。林先生は木下順二さんや山本安英さんと会って、やっぱりうまくいかなかった、で残念だけれどもという話になった。それっきりでおしまいになって、１０年会ってないんです。

そしたら宮城教育大学の人が、僕の書いた文章を読んで、こいつを呼ぼうといういうことになって林先生つまり学長の所へもっていったわけです。そしたら「なんだ、これは僕は知っているよ」という。それで集中講義に行って再会したわけです。だから林先生は田中正造と取り組んでいる芝居の人間というこ

とでまず始まっているわけです、僕のことは。僕は「宮城教育大学にきて僕は授業が出来るわけでもないし、何にもできない。ただレッスンをして何か学生達の中で、こういう形でしか開けない可能性みたいな物を持っている人もいるかと思うから、そのものがいくらか動けばそれでいいと思う。」といったら、「それはここへ来てもらうのにぴったりですなあ」みたいな。飲みながらの話ですけれどもね。僕はそれだけで。直接なんの関係もないわけですよ。芝居をやらなければ。田中正造のことがなければ。

そしたら突然電話がかかってきて、永田町の小学校へ行って「人間について」の授業をするから聞きにきませんかという。永井道雄文相が見にくるんだという。永井道雄とはあんまり関係ないし、何で僕の所へ電話がかかってきたのかなあとわからないんだけれども、「それじゃあ行きます」と言って行った。その時に林さんが、後で聞いたら、気が付いたのは、僕は授業にはいるとき、革靴で行くと音がするから、ズック靴を持っていって向こうで履き替えたんですよ。それに林さんが気が付いたらしいんです。なんかそういう事が一つあった。とにかくその時に授業を聞いて、「ふーんこういう授業やっているんだ。授業ということになるのかなあ」なんて思いながら、僕は帰ろうと思ったんです。そうしたら、これは宮城教育大の先生だけれども、「いや今日こられた方はちょっと飯を出しますから後で残ってください。」と。１０人もいないか。「ちょっと色々お話をしたい」と言うんです。そしてカツ重が出るという。カツ重にひかれて僕は残った。それで帰ろうと思った。永井さんもいるわけだし、俺なんかいたって教育とはあんまり関係ないから。そうしたら、なんか知らないけど、何か喋れというのがきて、私は林さんの語り、語りかけることの構造がみごとだといったようなことを述べたんです。教育とは直接関係ない感想です。そうしたら数日たってまた電話がかかってきた。林先生から。今度はＮＨＫで、こういう写真集がでると。誰かと話をして、問題点を考えたいんだけれども、あなた出てこないかと言う。何で僕と話をする？僕は全然関係はない。おかしなことになったなあと思ったけれども、とにかくまあいいじゃないですかみたいな話で、狐につままれたみたいな具合で行ったんです。でまあそこで対談をして、それがここに載っている。それで、先生はいったいなぜ僕なんかに声を掛けたんですか？と聞いたら、要するに一番正直に食いついて来ると言うんです。教育畑の人はああなるほどそうですねと言うばかりで、竹内さんはそんなばかな話はないとか、自分からいうとそういう事は信じられないとか、もしそうならこうじゃないかとかどんどん突っ込んでくるから、という。林さんらしいなあと思いましたけれどもね。

僕はこれでおしまいだと思っていたら、それからなんかいろいろとつながりが出来ちゃって、結局映画を撮った連中というのが僕の所へレッスンにきていた連中の仲間なんです。それでそれが先生の本を読んで、それで映画を撮ることになる。私は、沖縄に一緒に行ったりなんかしたんですけれどもね。そんな

ような事であって……、僕は湊川へ行って、授業をやった時、はじめて林先生と「ことば」について共同の授業だったし、後で私の授業を奥さんと立ち会っておられたこともあります。林先生が講演の中で、耳が聞えない竹内さんが生徒たちとつながろうと悪戦苦闘していたあの試行錯誤が授業というものの本来の姿だと言われたことはありましたが。

ところが僕は演劇の人間で授業だけだとなんか今ひとつはっきりしないから、芝居を持って行きたいけれどもと言ったら、それはいいと言って、いきなりあの人んとこへ行って話してこいという。林先生という人は速戦即決の人なんです。とにかく教員達のまとめ役の人に話してきてくれというので話に行ったら、それはいいですなあすぐやろうという。そんなこと言ったってその時に湊川へ持って行くような芝居が無いわけです。たまたま稽古している芝居は前衛的な芝居で、生徒なんか見たってわかりっこないような芝居なんです。でもねえこれしかないし、新しく作る訳にはいかんし、とにかくしょうがないからこれでもいいから行くかと言って、手紙を出したら、相手もさすがに判断に困ったんじゃないかと思うんだけれども。大阪の詩人で在日朝鮮人の林大造さん（金時鐘）という方が手紙をくれて、要するにこれは訳がわからんけれども、それでも志を持ってきてくれれば生徒は受け止めるみたいな話だった。それで行ったんです。面白かったですねえ。こんなの訳がわからないだろうと思っていたらば、その時にものすごいいろいろなことが起こったんです。

それで僕は授業にいくということは年に少しずつはやりましたけれども、それよりは毎年秋に芝居を持って行くということに全力をあげるようになった。そんなふうに始まった3年目に「田中正造と谷中村の人々」という芝居を作って持っていった。それであそこに演劇部ができた。演劇部を作るというのも面白いもんで、落第生教室というのがあるんですよ。要するに一年やったけれども出席が足りないしぐれてばかりいる、これは二年にする訳には行かないと、本当にゴンタばっかりですね。それを中心人物だった西田さんは可愛くてしょうがないわけだ。「あの連中はエネルギーはあるし見所はあるんやからなんとかしたい」と。だから落第生教室というのを特別に作って、夏休みまでに鍛えると。それでこれで良かろうということになったら、その場で横滑りして二年生にするという、そういう学級を作ると。どうも普通の授業をやってもしょうがないから、芝居をやらせようと思うんだけれども、来てくれ。と言われてそれで行って、授業をした。その時も、俺は授業なんかできないから芝居の稽古やるぞといって、稽古をした。そうしたら西田氏が、今日来た先生はどう思うかと言ったら、「はよ雇え」と言われた。「おんなじことを言った」と言って、えらい喜んで知らせにきました。ま、そんなようなことですね。

ただ林先生は僕が「からだ、からだ」と言ったとき最初は随分奇妙な思いもされたらしいですね。何しろ林先生の授業はパイドンが中心です。しょうがないから、パイドンを読み返してみる。すると、もう腹がたってたまらないんだ

よね。何を馬鹿なことを言うかと欄外にやたら書き込むくらいで。だからものすごく抵抗感があった。つまり肉体と精神を分離して、精神が高みへ昇って行かなければいけないという考え方でしょ？その当時の私は腹がたって、そういう私だから、林先生は随分「からだ」というのが奇妙に思えたらしいんです。その事については僕にはあんまりおっしゃらなかったけれども、何年かたって対談の時に、竹内さんが言うからだっていうのはローマ人の言うアニマというのに非常に似ていますねという風に言われた。もうちょっとたって、今度は亡くなられる前に、最後の病気で倒れられる前に対談したときには、竹内さんの言うからだというのは殆ど魂と同じですねと言われた。僕はそういう風に考えたことはないからびっくりして「はあ」と言ったっきりなんとも言えなかったけれども。林先生が僕の事を見ておられた、どういう風にみておられたかというのは、そういう事の方がむしろ自分としては残っている。ちょっと林先生の話に戻しましょう。この辺でちょっと休憩にしましょうか？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「人から人へ」

竹内：林先生の写真しばらくぶりに見たけれども、本当に嬉しそうな顔して話しておられるねえ。嬉しくてしょうがないから何百回もやられたんだやっぱり。教育界全体で言えば猛烈な逆風の中の悪戦苦闘なのですけれども。

星野：湊川の子供達にしてみても、そこにそういう形で本当に嬉しくて生きて立っている人が側にいるということを、彼らは実に敏感に感じているんじゃないでしょうかね。

竹内：自分達とつき合うのがこんなに嬉しい人がいるということがね。

星野：凄いことだろうと思いますよね。皆やっぱりいいかっこうしたり、なんか為にしたりとか、どっかでなんかかかえて接していく人、そういう形でくる人ばっかりですよね、どちらかと言うと。

竹内：例えば、湊川なんか、なんて言うのかな、被差別部落の生徒が半数以上というわけだから、使命感に燃えて来る教員がいるわけですよ。そしてさあどういう風にして授業したらいいかなあと気負って来たばっかりのが、あれは数学の先生だったかなあ、いきなり目の前を向こうから小さい女の子がきたと思ったら、ばっと真正面に立った。何だろう？と思ったら、「いっちょしばいたろか」とにらみつけられた。途端にびびっちゃってそれっきりなかなか立ち直れなかったという人がいた。その「しばいたろか」と言ったのがさっき言った女番長なんです。ちっちゃな子なんですよ。ああいう迫力は凄いもんねえ。

星野：私は子供相手じゃないからそんなことはなかったですが。名古屋のある地区で何回か夜人間関係の講座をしてくれと言われて行ったことがあります。難しく思われようが何と思われようが、ここでやっているのと同じ様な調子で

やりました。そうしたら一人一所懸命何か書いている人がいるんです。最後の日でしたよ。なんか紙に書いているんです。「これまで何回か一緒にやって良かったです。終わります」と言ったら、先生ちょっと待ってくれと言うんです。何ですか？と言ったら、彼女、いい小母さんでしたけれども、先生これもらって下さいと言って紙を持って来るんです。「似顔絵を書いたんです。」と。私の顔を。「先生これ持って帰って下さい」と言って。何をやっているのかなと思ってましたから、びっくりしました。と同時にすごく嬉しかったのを覚えています。やっぱり一生懸命な姿がこちらにも写るし、なかなか人が集まらなくてセンターの人が困っておられたけれども、ほんの２０人くらいで何回か繰り返しやってきた、面白かった経験がありますね。

竹内：いまこうやって写真を見直すと、これは林さんと授業を受けた人とのまったくふれ合いの記録であって、横からみている連中には手の触れようの無いことだなあと思いますね。

星野：南葛飾の生徒ともやっぱり違うんですか？

竹内：感じは違いますね。湊川というところはもう被差別部落というのがはっきりしているでしょ？しかも湊川という川があって、そのかたっぽの岸に湊川高校があって、その並びの５，６件先に山口組が分かれてどんぱちやっていたでしょう？あれの加茂田組か、かたっぽの大将ですわな。その組があって、湊川の学校の正門からちょっと行ったところに橋がかかっているんです。そこんところでばばんばんばんとピストルの撃ち合いがあったと言う。そこですからね。その橋の下っかわの、海よりの所が番町部落という。多分日本で都市としての最大の被差別部落ですね。ところが東京は被差別部落はわからないと言うか、隠れちゃっていて、そういう形は表へ出てきませんし。しかし、後で葛飾の近くの出身者でたしか尼工の教師になって、それで血筋を調べたら自分は被差別部落の出身だったということがわかって、東京へ戻って、という教師がいましたけれどもね。それくらいよくわからない。東京では部落問題研究会が高校でただひとつ南葛にだけある。だけども、部落問題研究会にこの学生が入っているということを公表すると、あいつは被差別部落の奴だという風に名指しされるから、それを公表しないという形で始めた。僕が授業に行っている間に自分で名乗るようになりましたけれどもね。お父さんが靴屋の人だったかな、その辺りから名乗り始めたのかな。部落問題研究会に入っているとこういう問題があるということを初めて名乗り始めた。在日朝鮮人の問題もそうで、在日朝鮮人もなかなか名乗らない。

竹内：奥さんどうですか？今までの話で……。

米沢夫人：主人が四ヶ月くらいこちらにお世話になりまして、その間、やっぱり大学行っているときは凄く楽しそうなんですね。名古屋に一人で家族からはなれて時間を過ごすということも一つ楽しかった事なのかも知れませんですけれども。先生にお会いして本当に良かったと言っています。私も今日ほんの一

時間ほどですけれどもお目にかかって、本当に主人がそういう風に楽しかったというか、非常に有意義な時間だったと言うのが本当によくわかって、私も今日こさせて頂いて良かったなと思っております。うちも子供が三人いますけれども、本当にまだ自分を見つけていないと言うか、なんかふわふわした所で、子供自身にもきっと自分に出会ってないんだろうと思いますし、こういう授業だとか、私も少しそういうようなのを見せて頂きましたけれど、そういうことに出会えたら子供も幸せじゃないかなと思うんですけれども。林先生でなくても、たとえ親子でもなんかそういう風な、さっきおっしゃった魂の世話みたいなものができたらいいなと思いますが。さっきお話伺っていて、こういうビーバーになった子供さんというので、一度そういう経験なさった方というのは、その後もそういう深いところで自分がみられるのかなあと、ちょっとそういう風に思いながらお聞きしていたんですけれども、一度そういう経験された人というのは、もう林先生がおられなくても、自分を見つめられるんじゃないかなという気がちょっとしています。私も小学校の参観とかよく行きますんですけれども、なんか面白くないなといつも思いますんです。子供もつまらなそうにしてますし、うちの子だけじゃなくて、皆が。特に小学校の低学年なんかは、まだちょっと半分先生も一所懸命勉強の方に子供の気を引きつけようという感じでわかるんですけれど。中学校になりますと、国語の授業なんかでも、文法の説明とかしてらっしゃるんですけれども、一応皆静かに聞いてて別に騒いでいる子はいないんですけれども、こちらが聞いていていても余り面白くないし、子供もなんかいやいややっているというか、だからなんかそういういい授業というかそういうものができないのかなあと言うか。そういう事を一度経験したら子供達も皆ちょっと少し変わるんじゃないかなという気がします。

竹内：追跡調査をやっていないのでわかりませんですけれども。湊川なんかで授業を受けた連中はどうなっているんだろうなと思いますね。教育の問題という方に戻ると、いろんな知識を獲得したり、それから授業でこういう事をやるといろんな事が深くわかるとか、そういう段階の事はどんどん開発されているような気がするんだけれども。林先生が提起された問題というのはそういう事ではない。哲学ということになるんだと思うんですけれども、人間の一番深いところで人間が人間として育っていくというためには、そこが耕されるということが、一番大事なところだと、そういう事だろうと思うんです。日本の戦後の教育で、あるいは近代教育というのは全部そうかもしれませんですけれども、決定的になかったという風にこの頃思うのは、いわゆる社会生活とか、そういうものを越えた人間にとって非常に大事な何かがあるということについて、しかと子供に伝えることがなかった、ということ。お金儲けること、偉くなるということ以上に人間には大事なことがあるということを学校ではなにも考えさせないでしょ？そういうのが教育と言えるのなと思うけれども、事実そうなんですよね。

星野：私の経験なんかでいいますと、高校の時の国語の先生だったんですけれども、それは非常に影響を受けたんですが。芭蕉の大好きな先生だったんですが、授業外に時間を持ちましてね。田辺元さんの「歴史的現実」というこんなうすっぺらい本ですけれども敗戦直後で、本が無いですよ。それを彼が持ってきて、私は一所懸命ガリ版を起こして、小さい冊子をつくって、それで１５，１６人でしたか、ずっと読んだ。それでわかった訳じゃないんですよ全然。難しくて何もわかってない。でも、その先生中心に集まって、なんか話をしたり説明してくれたりしていることの中で何か大事なものといったらいいのかなあ、そんなものが、何かと言われたらすぐには言えないんですが。大切な、なんかある種の楽しさ、苦しいんだけれども、しんどいけれども、そうやっていることの楽しさみたいなものを植えつけられた経験がありますね。

竹内：林先生もそれをやられたらしいですよ。仙台で。復員してきた若い青年達に、何人くらいかよく知りませんですが、それこそソクラテスを読んだり、二宮尊徳を読んだり、いうような事をされたようですね。そこでやった人がいろんな形で林先生とつながっているようです。

星野：決して中身はわかっていないんだけれども、難しいことばかり書いてあるような感じでわかってないんですけれども。そうしていることの楽しさみたいなものだとか、何かしているという。しかもそれはいい加減なことをしている訳ではないという、そういう感じが強くありました。その先生は本当に一生懸命関わってくれた人で、卒業してからも夜中まで話をしに行った経験があります。

竹内：林先生の晩年の事を考えると、今の話とつながって来ると思うんだけれども。田中正造のことについて触れざるを得ないところがあるんですけれども。林先生が「田中正造の生涯」というこの本を書くのに９年かかっているわけです。初めの注文、注文というのは天野さんという編集者が提案したんですが、書きましょうと言ってから書くまでに９年かかっている。一番の問題は、谷中村へ入ってどういう事を正造が学んだかという問題で、僕はこれを読んでいると、林先生が最後に湊川へ入って、生徒達と触れたときの事があるからそれが出来た、湊川へ入ったことが体験になって最後のところが書けたという気がするんです。結局谷中村へ入って、正造が自分をどの様に作り替えていったかということを全身で読み抜いていかれるというか。正造のこの時期は殆ど彼の日記以外に資料が無いんです。それから彼についていた若い青年、島田宗三の覚書と。

「田中正造における学ぶということ」が今たまたま出てきたので、読みます。「私はかつて田中正造のような人においては、一つの事を学ぶということは、その事において自分が新たに作られることだと書いたことがある。学ぶということは田中正造の師友新井奥邃の理解にしたがえば、自己を新たにすること。すなわち旧情旧我を誠実に自己の内に滅ぼし尽くす事業であった」こういう風

に理解していくというか、発見していくこと。「その事が成し遂げられない間、正造においては理解は成立しなかったのだ」理解というのは農民に対する理解でしょう。「私は谷中における正造の苦学の後を辿る度に聖書にあるマタイ伝の５、２１－２６最後の１コドラント迄償わない限り牢獄を出ることはできないという言葉を思い出す。最後の一厘まで償わなければ、牢獄を出る、自由になることはできないのである。学問が人を自由ならしめるのは学問が借りを償うことにおける呵責のない誠実さに裏付けられている時だけである。学問が田中正造の人生を救う力であったのはそれが充分にこの裏付けを有していたからである。」つまり林さんは田中正造は学問をしていたという風に言われるわけです。この学問というのは大学の教育とはだいぶ感じが違う。「田中正造の谷中の場、苦学の中心課題は、旧情旧我の牢獄を出ることであった。」こういう言い方をされるということは、ただ田中正造を読み抜いて行くということだけではできないことであって、今読み直すと、どういう事で先生は自分の身にこたえて感じられたんだろうかと、改めて突っ込んで聞いておかなかったのが残念だみたいな気がします。こういう風に読んでいくということは、これが出た後で田中正造の全集が出ているし、研究もずいぶんいろいろと広がっているんだけれども、深さというか正統的な研究から言ってどういう風に通るのかよくわかりませんですけれども。

一番最後に対談をさせて頂いたときに田中正造はキリスト教に出会ってという言い方を僕はした。新井奥邃によって出会ったと思ったんだけれども、キリスト教に出会ったのではなくて、キリストに出会ったのではないかと林先生に訂正されたんです。その事は僕にちょっと動きがつかないような感じで胸に残っているんです。林先生は晩年は、僕は真正面から「林先生はクリスチャンですか？」と聞いたことがあって、「うーん」としばらくだまって考えていて「今はクリスチャンとは言えんなあ」というお返事でしたけれどもね。洗礼を受けているんです。クリスチャンネームがあるんです、若い頃に。そういう事はいっさい言われなかったけれども。しかし林先生の晩年の授業論にははっきりとその姿を現しているように思います。有名になった言葉ですが、林先生は「学んだことの証しはただ一つで、何かが変わることである」と書かれた。その後で、その「変わる」とは何が変わるのか、ということについて二回位書かれてますが、湊川に入られた後で大きな転機とみられている「教師にとって実践とは」という講演の中では「コンバージョン(conversion)すなわち『向きが変わる』ということです」と言われているんですね。普通学ぶと言われてることは自分の知識や経験になにかをつけ加えていくこと、いわば自我の拡大といいますか。これは教養主義といってもいいかかと思いますが、それと全く違うわけですね。人間の向かう、私の言い方だとからだ、全存在の向く方向が変わってしまう。だから今までマイナスだったことがプラスになることもある。学ぶというのはこういうconversionの始まりというか。これは、林先生の教育観の根本だろう

と最近考えているのですが、これはやはりキリスト教の人間観がエコーしているように感じます。

星野：その著作集なんか、私は並べているだけですけれども、１０巻くらいありますね。読み易いというのかなあ。きっと授業で子供達に語りかけられているのと同じだろうと思うんです。

竹内：あのね、林先生は、変なことなんだけれども、東北大学の教授でいる間、本を一冊も書いていないんです。全部小学校で授業を始めてから書いたものです。その前は翻訳はあるんですが。テーラーのソクラテス論とか。その本はいま誰かのところへ行っちゃったんだけれども。僕がびっくりしたのは、わりかし厚いんですね、読んでみると。ところがテーラーの翻訳は２／５くらいしかない。あとの３／５は林先生の註釈というより論文なんです。そういう本はあるんですけれども、著書は一冊も書いたことがないそうです。だから読み易いということ自体の意味が…。

星野：だから本当にわかると言ったら問題なのかもわかりませんが、すっと読めるという感じがね。しかし、はっと考えたらずいぶん難しいことをさっとおっしゃっているという感じがしないでもない。その辺の所はやっぱりこれはなかなか出来ることじゃない、私らも出来たらと思いますけれども。難しいことを本当にその人の言葉で語れるというのか、それはやっぱり相手に通じていくということで何か感じさせるものがある。子供と話されるときも決して落としておられない。

竹内：ソクラテスの話をされたその「賢いということと物知りであるということ」かな。それの授業を聞いた人が、驚いたというんです。東北大学の退官講義の時の内容とまったく同じだというのね。それを高校生相手にああいう形で喋っている。勿論、多分文体というか話体と言うべきか、そういう物は全然違うんでしょうけれどもね。内容的には同じだと。

星野：凄いですね。それが出来るということは、“その人の話”をしているからだと思います。まさに借り物ではない。まさにその人がそこにいて話をしているからだと思いますけれども。

竹内：しかし最後の１コドラントまで償わない限りこの牢獄を出ることはできないそれが学ぶということだということになると、これは偉いことだ。とてもじゃないけれども。田中正造の晩年の日記を見ますと、村の人達の動静についての文章が１／３くらいかなあ。半分もないと思います。後は殆ど神についての自分の考察で埋まっているんです。あれなんかどこまでが日本的で土俗的な意味での神で、どこまでがキリスト教の神なのか、僕なんか芝居を作るときに読んでいて、見当がつかないと言うか、まだ読み切れないところでしたけれども。多分林先生じゃないと読めない部分が随分あったんじゃないかと思いますね。新井奥邃の研究をされていないと、ただキリスト教の神学者というだけではとても読めないと思いますし。残念ながら新井奥邃の研究は殆ど必要な資料

は揃えたと言っておられたのですが、そのままで亡くなられてしまった。ほんの少し概略的なことに少し手をつけられたはずですけれども。

病気になられてからは、なかなか仙台まで行ってお目にかかれなかったですけれども、倒れられて、少しよくなられて、話したときに、口がまだうまく動かないけれども、一番最後に話した時はおかしな話をされたなあ。「竹内さん、日本でメフィストフェレストを演じられる役者がおりますか？」と言うんですよ。いきなり。僕は考えて、千田是也というのがメフィストをやったことがあるけれども、今いないでしょうねと言ったら、しばらく寝たまま上向いて考えていて、「メフィストを演じることの出来る役者を育てられなかった罰として竹内さんにメフィストを演じることを命じます」と言うんです。僕はびっくりして、「いや、それはあかん」と。「メフィストというのはあれは光の影みたいなもんだから、ファウストがいなければメフィストを演じること出来ない。林先生がファウストをやるなら僕はメフィストをやる」と言ったら、先生はしばらく考えて、「これはえらいことを言ってしまったなあ」と笑い出された。そういうやりとりが、それが一番最後の話でしたね。で、奥さんが出てこられて、しばらく前から若い頃にみたミュージカルとか演劇とかそういう事をしきりと話をされていると。林先生芝居が好きだったみたいですね。だけれども、教育哲学をやるために押し退けておいたものが、ああいう時期にだーっと戻ってきたのかもしれないというような事をちらっと言っておられた。そういう意味で、僕なんか見てて思うんだけれども、からだが、年取ってからも柔らかい人だったですね。よくからだの動く人。決して講壇哲学者ではなかった。

「教育亡国との戦い」

星野：なかなか興味深い話ですね。現に授業に携わっている沢山の先生がいるわけですけれども、その中で、沢山でている林先生の本がどんな風に読まれているのかその辺が何かありますか？本屋さんにいっぱい並んでいるけれども、どんな風に皆さん方は関心を持っておられるのか・・・。

竹内：どうでしょうか。僕はここしばらく自分の中で抱えているだけで整理できないものを、時間かけて自分の中ではっきりしてくるまで待つというような感じで、全然タッチしてないのでちょっとわかりません。今度映画がビデオになったりしますね。どういう風に皆が考えておられるのかなあという。なんかお聞きになることありますか？

米沢：それは聞いたというか、聞く機会も余りないんですけれども。ただどこかに象徴的な例が紹介されていたと思いますが。林先生が例えばどこかの小学校で授業をする。もうほとんどのところがそれを校長、教育委員会、全体は絶対歓迎できないわけですよね。こういう風な授業をぜひ聞かせてやりたいという、そういう志を持った教師がいたとしても、おそらくその周りは全部それに

対して敵対的であるに違いない。そんな風な学校というものがそういう姿をとってそこら中にある。そういう身構えを逆にさせているのは何なのかなあということを考えてしまいます。どういうところが迷惑と思うのか、困ると思うのか。

星野：片方でまったく同じことを教師達は言っているわけですよね。話ししなければいけないといっていますしね。現実には出来ていないことがいっぱいありながら、片方ではそんなことを言っている。教育委員会でもそう言っているはずですし、いまおっしゃるように引っかかってしまうということになるんでしょうね。形に引っかかっているのはいかにも幼稚だという気もするし。

竹内：それは本質的なところでちゃんと感じているからじゃないんですか。

星野：これだけ本が出ている、本屋さんに並んでいるということはやっぱり関心のある人がそれだけいるということでしょうね。でないと本屋さんに並びませんですからね。名古屋なんてあんなに限られた本屋さんの中にさっと並ぶことはないはずなので。一人一人の教師の中になんかの形でそれは生きていっているんだろうなと思いたい気がするんですけれどもね。

米沢：なんかそこに危険な警戒すべきものがあるという風に受け取る感覚があるとしたら、そういう風な感覚において守られている教育というのはどういうものなんだろうなという。

竹内：「教育亡国」という本を書いた人ですからね。文部省が目論んでいる方針は人間を殺すものだと明確に指摘しているのだから、今の学校の管理者が懸命に教え込もうとしている知の方向を根底から崩そう、学ぶということを検討しようということの危険は、敵の方が敏感に感知するということでしょう。

星野：それを非常に悪く言ってしまうと、目覚めてもらうことが困るという言い方もできるかもわかりません。一人一人の先生はやっぱり熱心な人が結構おられますし、関心を持って勉強している人もおられる。ところがちょっと一つ上になってくると、なかなか違うんですねえ。

竹内：僕は、近代学校というものは、次の社会の受け継ぎ手を養成するという機能を初めからしょっているわけだから、教員というものは、全部僕流に言うと、体制の走狗であるわけですね。体制の走狗であるという機能と別に、時代やなんかを超えて子供の成長に付き添うものとして、そこにいようとしたときに、根本的にぶつかり合うと言うのか。華々しく何かをするというじゃないけれども、その人が立っている生き方自体が変わってしまわざるを得ないということがあると思うんです。だから、何かつまり次の時代のために思考の訓練とか知識を得るとかいうことと、全然別な、人間として伝えたいことをその人が持つか持たないか。そこに中心を置かれたならば、現在の学校という機能が狂うわけだと言えると思うんです。ここ数年現場の教育というところへタッチすることを、止めちゃっているもんですから、現状がよくわかりませんですけれども。僕は、教員というものはそういう矛盾をしょって、意識している人じゃなければ信用しないという言い方していたんですが、この頃になってみると、

どうもそれじゃあ間に合わないという気がするんです。しかし、学校は、社会の縮図でしょう？学校だけが悪いん訳じゃなくて、子供達がこれから生きて本当に強く人間的であってほしいと思ったら、そこから逃げるということだけじゃどうしようもないとこの頃思うんです。

星野：人を育てるというか教えるということについて、例えば今の教育専門のコースで、教育原理とかなんとかあるんでしょうけれども、それは科目としてはあるんでしょうけれども、真剣に本当に皆でその事を考えているかというと、そういう時間というのは案外持たれてないのだろうと思えてしまうんです。で、いい悪いは別にして、ある意味でよくない面もあったんでしょうけれども、例えば戦前の師範学校なんてのはそれをやっていただろうと思いますね。それをある方向に向けていったから、問題が大きいわけですけれども。少なくともその事についてかなり徹底的にやっていたのだろうと思います。

竹内：林先生は大正リベラリズムの申し子だと自分で言っておらるけれども、大正リベラリズムの意味は随分大きいんじゃないかという気がしますね。林先生についてだけじゃなくて。私の小学校は今なくなっちゃった埼玉県立女子師範学校付属小学校。１９３１年（昭和６年）入学。後で教育に関係するようになってから奇妙だなあと思うのは、例えばこういう事があるんです。一学年に男女両方合わせて四十人足らずの一学級しかない。どうも実験校みたいなものだったんじゃないかと今になって思うんですが。級長というものがないんです、昭和初年に。それで５年生になると自治会当番というのが選挙される。自治会というのをちゃんとやるんですよ。議会をやるんです。先生は横にいるんだけれども、発言権無いわけ。それで私の学級の第一回の自治会当番に私が選挙されて、議長をやった。そうするとボスがいて、妨害してもうどうしようもないわけだ。とうとう僕が、退場を命じたんです。どういう大喧嘩になるかと思って、こっちは緊張して退場を命じたら、そいつが泣いて帰っちゃったんです。それで慌てたんだけれどしょうがないやてなもんだよね。そうしたら、その子の親父さんというのは、埼玉県会における政界のボスなんです。戦後たしか参議院議員かになった大物なんですね。それで後で文句がきたらしくて、こっちは子供だから全然わからないけれども、親が夜になって教員の家に呼ばれたり、ま、いろいろありましたね。そのころとにかく自治会というのが他にあったろうか？そういうことがあって次の時に今度は僕の仲のいい友達が議長に立候補した。立候補というより友達が推薦した。ところがボス達の仲間からもう一人候補が出た。よく憶えてないんだけれども。そうすると珍しいことに先生が発言をしたわけです。「先生はこの人よりこっちの方がいいと思う」と名前を挙げたわけです。それはボスの一の子分なんですよ。でね、先生というのはこういうことをするものなのか。と子供心に非常に不思議だったことを覚えていますね。ところが絶対的に僕の仲間が勝つわけ。何故かというと、僕の仲間は男は３，４人しかいない。後はボスがみんな１０何人押さえていて、これで喧嘩

する。だけど女の子が全員僕の側へ付くんです。女の子が２１票はいっちゃうと、男が全部反対しても勝っちゃうんです。というようなことがあって、それは余談なんだけれども。

当時自治会というのがあるんです。後でこういうことがあったか聞いても他では誰も聞いたことがないと言うんです。そういうことがどうしてあったんだろう。例えば、今もって不思議なのは、お月見会というのがあって、夜出かけていくんですよ。みんな学校へ。その頃になるとみんな一人一つづつ灯籠をこさえるわけ。持って帰って家で完成させて、それに蝋燭付けて、それを家族でぶら下げて集まってきて、校庭で、歌ったり踊ったり、夜やるんです。とにかくあれは明らかに大正リベラリズムの名残で、その実験校じゃないけれども、誰かがそれをやったに違いない。それで勝田守一さんの兄さんがあそこにいたことがあるけれども、それがやったんじゃないとか、いろんな話が出るんだけれども、よくわからない。とにかく僕が卒業するまではそういう。自治会なんかあの軍国主義の直前にあるわけですよね。

星野：そうでしょう。だから当時の方が上のコントロールがむしろ薄かったんじゃないかという気がするんです。今の文部省や教育委員会からのコントロールはものすごく強いでしょう？だって現場の先生は戦々恐々とするわけですからね。

竹内：今だったらこんなこと考えられないですよ。

星野：本当考えられないですよね。統制が強いようで結構現場は色々動けたんじゃないかな。だからあの当時の教師の方が生き生きしていたという気がするんです。

竹内：だから大正リベラリズムの連中が軍国主義がやって来ると緊張感を持ちながら授業やってたんじゃないかという気がとってもするんです。例えばこれは国語の教科書の話だけれども、谷川俊太郎達が「にほんご」という国語の教科書のサンプルみたいなのをこさえた。その一番最初が「わたし　かずこ」。僕はこれはなかなかいいと、話言葉であると、教育関係者だったら、「わたしは、かよこです」という風に書くだろうと、誉めた。誉めたのは僕一人だったそうですけれどもね。それで谷川さんと仲良くなったんだけれども。その時にこれよりも、子供の時に、僕は受けなかったんだけれども、僕の弟から始まった教科書のトップの方が印象が強いという風に書いた。それは「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」という。昭和７年くらいから。

星野：そうですよ。尋常小学校の国語の・・・。

竹内：国語の、とにかくそれまではザラ紙みたいな紙に黒白のペン画みたいな挿画だった。僕らのは、明治３０何年から２０年くらい続いている教科書なんですね。「はな、はと、まめ、ます、みのかさ、からかさ、からすがいます。すずめがいます」。その前が「はた、たこ、こま」という奴ですけれどもね。弟が教科書を持って帰ってきたのを見てびっくりした。パッと開けるとつるっ

としたきれいな紙で、色刷りで、桜の花の色がふぁーと、教科書というのにこんな絵本みたいにきれいでいいのだろうかと思った。そして「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」。その次が「コイ、コイ、シロ　コイ」でしょ？その言葉のリズムとが、僕には素晴らしかった。それで僕は、「わたし　かずこ」も悪くないが、どうもはずみがもうひとつだ、「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」の方がいいなあと。

その文章を読んだ教育関係の出版者の人がびっくりしたと言う。あの教科書は三番目が「ススメ、ススメ、ヘイタイススメ」なんです。軍国主義教科書のはしりと自分達はいままで考えていたし、そういう定説であったと。だからあれを見てびっくりしたと。その後こういう本がありますと言って持ってきてくれたんです。それはその教科書を作った井上剋という人のことを家族などに聞いたりして書いた本なんです。まさに大正リベラリズムですね。今までの教科書にはない生き生きとした子供のことばの教科書を作りたいと思って一所懸命、努力する。ところが一方で軍国主義が台頭して来る。それにどう抵抗するか。鍔ぜりあいなんですよ。あの教科書は。だからある部分はあっと思うくらいに胸を打つものがあって、ある部分は軍国主義という話になって来るわけだね。だからそういう鍔ぜりあいの中で生き生きというものが輝いていた。それは全体からすれば小さいことだろうけれども。今はそういうものが見えない。全部ベタ一面に灰色で、そういう意味では今というこの時は凄い独裁的社会だと思いますね。そういう意味で言うと、林先生のやったことは本当に体当りで、突破口を開こうとしたことで。

どうぞ何かおっしゃって下さい。さっき申し上げたように、これをきっかけにして考えてみるということですから・・・。「教育の荒廃とはどういうことか。今の学校には教育はない。」と書いてある。「教師の原罪」「魂の世話が教師の仕事である。」同じソクラテスでも、林先生のは、「魂の世話」ということになる。私は「産婆」という言葉を頂いた。声の産婆と。さっきドクサの吟味と言ったけれども、ドクサの吟味なんていう言葉一つを何十年どういう事かと研究し続けてこられて、そして実際にやっておられたのだからなあ。今日は林先生その人に則して話すという形になりましたが、林先生を語るとなれば、本来は林先生御自身が田中正造や阿部老中をとり上げた授業のように、本人が立っていた歴史的状況を、林先生で言えば教育の荒廃の現状を詳しく語って、そしてそれを見ている眼を自ら生きてみる、という方法を取るべきなのだろうと思うんです。その不充分は今後自らに問い詰めたいと思います。